

立正大学古書資料館蔵
奈良絵本『大織冠』上巻
—影印と翻刻—

伊藤 善隆



シリーズ・アタラクシア Vol.4

立正大学古書資料館蔵
奈良絵本『大織冠』上巻
—影印と翻刻—

【目次】

| | |
|----------------------------------|----|
| はしがき | 1 |
| 冊子本『太しよくはん』上巻影印 | 7 |
| 巻子本『太しよくわん』上巻影印 | 59 |
| 立正大学古書資料館蔵『大織冠』書誌・冊子本（上巻）翻刻・注・校異 | 75 |

はしがき

本書は、立正大学古書資料館が所蔵する二本の『大織冠』（冊子本『太しよくはん』913.41 Ta24_1_3_02、巻子本『太しよくわん』913.41 Ta24_1_3_01）を影印本として刊行するものである。本冊には、各全三巻のうちの第一巻を収録した。本書を教材に、学生諸君が変体仮名の読解を自習できるよう、冊子本の翻刻と簡単な注を添えた。もちろん、一般の読者の皆さんにも、この綺麗な本を楽しんで頂けることと思う。なお、本書の内容は、令和元年度1期科目「書物の基礎2」履修者の学生諸君と授業中に進めた作業の成果を反映させたものである。

❖舞の本

『大織冠』は「舞の本」と呼ばれる一群の作品の一つである。舞の本とは、室町時代から江戸時代初期に流行した「幸若舞」の台本を読み物に転用したもので、他に『入鹿』『満仲』『景清』『烏帽子折』『夜討曾我』等々、四十種類以上が存在する。織田信長が愛誦したという「人間五十年、化天の内を比べれば、夢幻のごとくなり」という一節が幸若舞の『敦盛』のものであることは、一般にもよく知られている。

信長をはじめ戦国武将たちが幸若舞を好んだのは、その内容に『平家物語』や『曾我物語』などの軍記物に取材した作品が多いからだと言われている。もともと芸能であった幸若舞だが、読み物の舞の本となって享受者層をさらに広げた。江戸時代になると、慶長古活字版や寛永整版本以下の刊本、奈良絵本や舞の本絵巻などの絵入の写本、あるいは物語の名場面を描いた屏風なども制作されるようになった。

◆奈良絵本

「奈良絵本」とは、本書で紹介する『大織冠』のように、金銀泥や箔、朱や緑青などを使用して色彩豊かに描かれた絵本をいう。室町時代後期から江戸時代初期にかけて多数制作された。奈良絵本と呼ばれているが、主に京都で制作されたらしく、その絵は素朴で稚拙なものから土佐派風の豪華なものまで様々である。

奈良絵本として制作された作品には、舞の本や御伽草子のものが多いが、『竹取物語』や『伊勢物語』などの王朝物語、あるいは『徒然草』や『長恨歌伝』などもある。主な読者は、ある程度の身分のある家の女性や子どもたちであったと考えられており、とくに高貴な姫君の輿入れの際の調度品や大名家などの棚飾りとして制作されることが多かったのだろうと推測されている。

以前の研究では、室町時代に制作された古い伝本が尊重されたが、研究の進展とともに江戸時代に制作された華やかなものも注目されるようになってきた。近年では十七世紀に制作された幸若舞を主題とする奈良絵本や屏風に焦点を絞った展覧会（海の見える杜美術館「幸若舞曲と絵画―武将が愛した英雄たち―」平成31年3月2日～令和元年5月13日）も開催されている。

◆『大織冠』のあらすじ

大化の改新の功績で大織冠に任ぜられた藤原鎌足かまたりには、光明子こうみょうしと紅白女こうはくによという二人の娘がいた。三国一の美人という紅白女の評判を聞いた唐の太宗皇帝は、彼女を后に迎えるため、勅使として運賃を日本に遣わす。鎌足は一度は辞退したが、太宗は再度勅使を遣わし、聖武天皇も婚儀を認めたので、紅白女は唐へ輿入れした。

輿入れ後、紅白女は小国の出身である自分が大国の后になった名誉を日本に残すため、無価宝珠むげほうじゆをはじめとす

る様々な仏具法具の宝物を興福寺に寄進することにした。宝物は、万戸將軍運宗と三百人の兵が護衛し、船で日本に送られた。

いっぽう、海底に住む八大竜王たちは神通力でこのことを知り、自分たちが成仏を遂げるために無価宝珠を奪い取ろうと画策し、摩醯修羅まがいしゆらを大将とする阿修羅たちに命じて「ちくら」の沖で合戦となった。(以上、冊子本上巻)

唐の兵は太鼓を打ち鳴らして鉄砲を放ったが、阿修羅たちは火焰の雨や悪風で応戦した。初めは苦戦した運宗たちだが、馬の足に浮沓をつけ、海の上を走って阿修羅たちを撃退し、最後は觀世音を念じつつ華鬘の旗を差し掛けて攻めかかり、勝利を収めた。

しかし、竜王たちは諦めず、こひさい女という竜女を空舟に乗せて万戸の許に送り込み、宝珠を奪わせようと謀る。万戸はこの企みに気づかず、仏法について竜女と問答を重ねるうち、竜女に恋心を抱き、そこにつけ込まれて房崎ふささきの浦で宝珠を奪われてしまう。

このことを聞いた鎌足は無念に思つて、何としても宝珠を取り返そうと、房崎の浦へと赴く。そこで、泳ぎの上手な海女を見込み、二年間生活を共にして契りを結ぶと若君が生まれた。鎌足は自分の正体を海女に明かし(以上、冊子本中巻)、自分がこの浦に来た目的を説明して、宝珠を見つけて取り返すように頼んだ。

海女は、海底の竜宮界へ行き、宝珠の在処を突き止め、鎌足の元へ戻る。嚴重に守護された宝珠の奪還は難しいと海女は言うが、鎌足は、舞と管絃で竜王たちをおびき寄せ、引き留めている間に宝珠を盗み取るよう、海女に指示する。もし、自分が殺されてしまった場合を考えて若君を心配する海女に、将来は若君を房崎の大臣として藤原氏の棟梁とすることを、鎌足は約束する。

やがて都から舞手を召し下し、舟の上に舞台を作って奏楽と舞を始めると、果たして竜神たちはその舞に見と

れるばかりであった。そこで、鎌足の指示どおりに、海女は竜宮の宝殿に至って宝珠を盗み取るが、見張っていた小竜に見つかり、船上に戻る前に食い殺されてしまった。しかし、海女は死ぬ間際、自らの胸を切り裂き、そこに宝珠を隠していた。これを知った鎌足たちは、嘆き悲しみ、海女の亡骸に若君を近づけ、母との最期の別れをさせた。海女は亡くなってしまったが、宝珠は釈迦仏の眉間に埋め込まれ、三国一の重宝として興福寺に納められたのだった。

◆『大織冠』の魅力

『大織冠』は、讃岐志度寺に伝わる「玉取り伝説」に取材した作品とされる。同材の作品として謡曲の「海女」があり、後には近松門左衛門の『大織冠』などにも影響を与えた。

「大織冠」とは藤原鎌足のことだが、本作では息の不比等と同一人物とされ、娘の紅白女も架空の人物であるなど創作が加えられている。さらには、国を跨いだ求婚譚や、異類との合戦譚、英雄が騙される恋愛譚、竜宮への冒険譚、そして母親の愛情譚など、読者を楽しませる多くの要素が盛り込まれている。その点が、後世まで愛される作品となった理由だろう。ただし、現代の娯楽読み物とは、当然ながら相当に違う要素もある。学生諸君はこの作品をどう読んだのか、授業中の発表やレポートから紹介してみたい。

作品全体の印象としては、「文章と挿絵があるので、ライトノベルのようだった」と、「ファンタジーのようだが、よく読めば現代のファンタジーとは違う」という感想や、「タイトルが「大織冠」なのに、鎌足本人は、あまり活躍していない」、あるいは「上巻は紅白女、中巻は万戸將軍運宗と竜女、下巻は海女と主人公が巻ごとに変わる」という指摘、「宝珠を手に入れてハッピーエンドになるのかと思ったら、竜に殺されてしまう展開に衝撃を受けた」といった意見も多かった。

また、「女性が活躍する話なので、女性読者向きの話だと思う」という意見があったが、同時に「男性が女性を利用しており、男尊女卑の要素があるから、男性読者向きの話ではないか」という見解、さらには「男性が自分の目的を果たす手段として、女性を道具のように使っている。当時の女性蔑視がうかがえる」、「妻は夫に尽くすべきであるという女性のあり方を示しているのではないか」、そして「紅白女や童女の美しさに関する記述はあるのに海女にはない。身分差別が露骨に表現されている」という指摘もあった。

このように、現代との価値観の差異を敏感に本作から読み取る一方で、「女性の美しさや強さを感じることできるのがこの話の魅力」、「中巻、下巻とも、女性が宝珠を勝ち取る展開になっており、女性の内面や適応力の強さを感じる」、「海女の強い愛と鎌足の切なさ、感動がよく表現されている」という感想、あるいは「異界からきた非現実的な存在との戦闘シーンは、マンガのような娯楽性がある」という意見、さらには「万戸將軍の戦いで陣太鼓を強調したり、挿絵で日本人と唐人の違いを明確に描いたりする点に、日本人の自意識が見える」、「万戸將軍の過失を鎌足が取り戻すという話の展開は、鎌足の名声を高めるように創作されたのだろう」等々の指摘もあった。こうしてみると、学生諸君は、本作の魅力や主題についての確に言及しており、室町時代の物語が世代を超えて現代の若者にも充分に受け入れられていたことが確認できる。

さて、学生諸君がとくに面白がっていたのは、上巻では修羅たちを打ち破った万戸將軍運宗が、中巻で童女に「ハニートラップ」を仕掛けられる場面である。超人的な強さを持ち、宝物を護った英雄である運宗が、童女にあっさり騙され、翻弄されてしまう。この場面の面白さは、本作の主題が、たんに男尊女卑や身分差別を助長するような性質のものではないことを、あらためて考えたり理解したりする契機になったようだ。

いっぽうで、「仏教の知識が必要」という意見もあった。本作は、いわゆる本地物の御伽草子のように、主人公の信心や神仏への崇敬の念が大きく強調される性質の作品とはやや異なる。しかし、中世の文学作品を理解する

ためには、仏教に関する興味や関心、知識が必要であるということに、自ら気付いた学生も多かった。

そして、奈良絵本の魅力、すなわち挿絵の美しさも、もちろん忘れることはできない。「繊細緻密な絵に感動した。絵も本文と同じくらい魅力的だ」、「もっと多くの奈良絵本を見たい」、「美術史についても勉強したくなった」という感想も多くみられた。

❖ 『大織冠』へのいざない

御伽草子や舞の本は、私たちの先祖たちが何世代にもわたって楽しんできた文学作品である。受講者の中には、子どもの頃、児童書で『大織冠』を読んだ思い出があると教えてくれた学生もいた。

たしかに、先に紹介した学生諸君の感想にもあったとおり、『大織冠』には、現代人にとっては俄に共感したり理解したりすることが難しい要素もある。そうした要素に注目するならば、『大織冠』の世界は「身近な異文化」であると言っても良いだろう。しかし、これを翻って見れば、現代の私たちが『大織冠』を読むことは、私たちが当たり前だと思っている私たちの価値観や、私たちの社会や家族のあり方、等々をあらためて見直す契機にもなるということである。何世代にもわたって読み継がれてきた物語を読む醍醐味とは、こうした点にあるのかもしれない。まして本作の場合、このように美しい挿絵とともに楽しめるのだから、なおさらである。

〈参考文献〉

麻原美子・北原保雄校注『新日本古典文学大系59 舞の本』（岩波書店、平成6年7月）

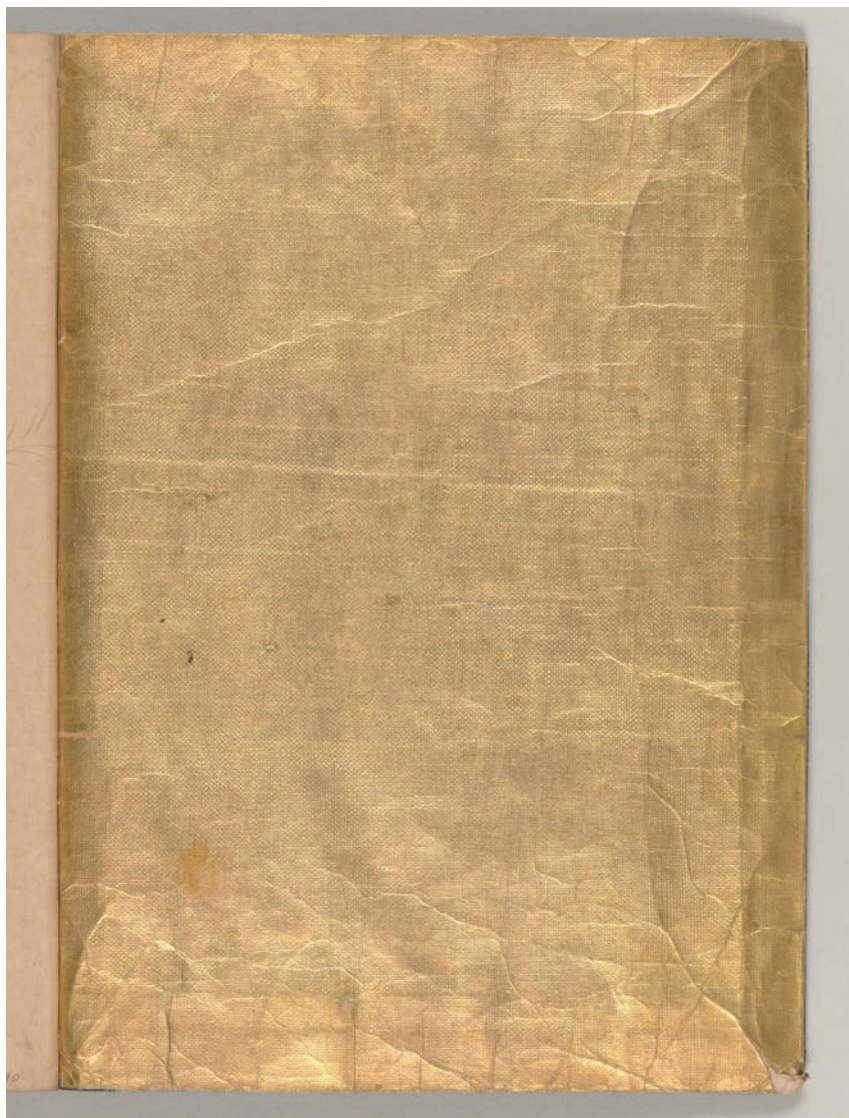
『幸若舞曲と絵画——武将が愛した英雄たち』（海の見える杜美術館、平成31年3月）

恋田知子「大織冠の物語絵」（前掲『幸若舞曲と絵画』所収）

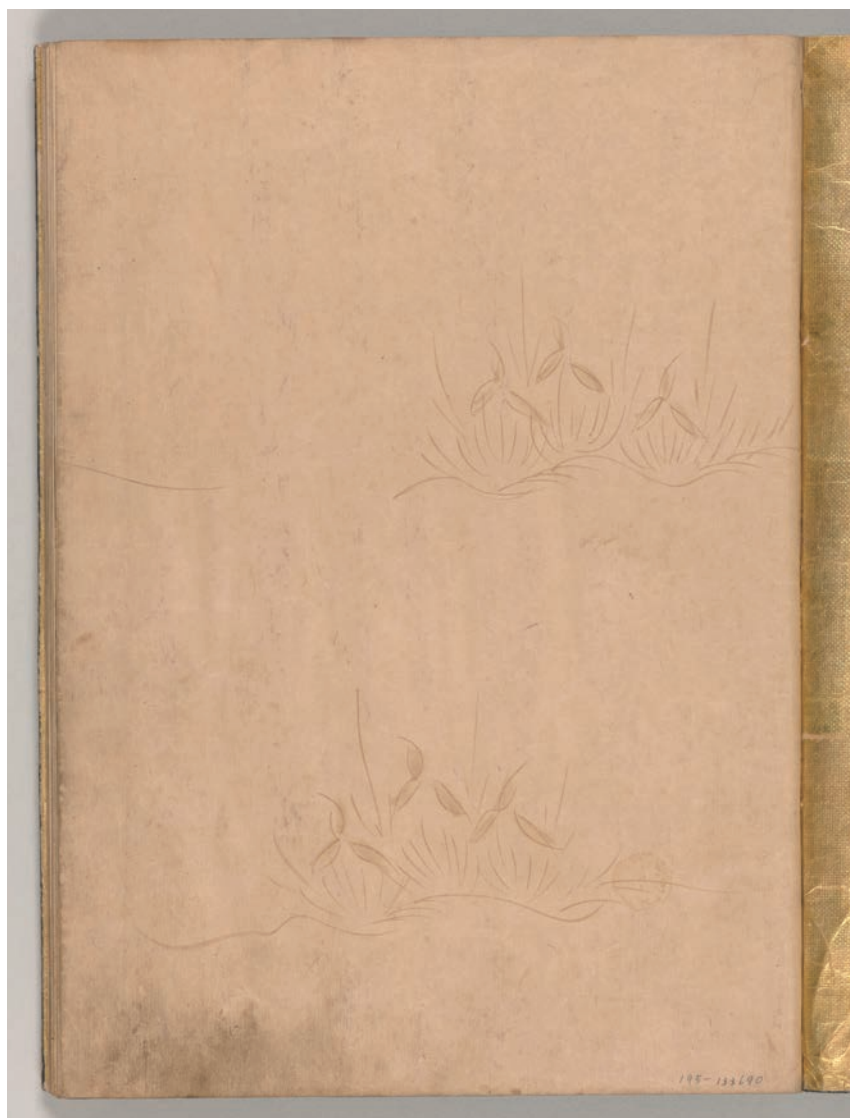
冊子本『太しよくはん』上巻影印



(上巻表紙)



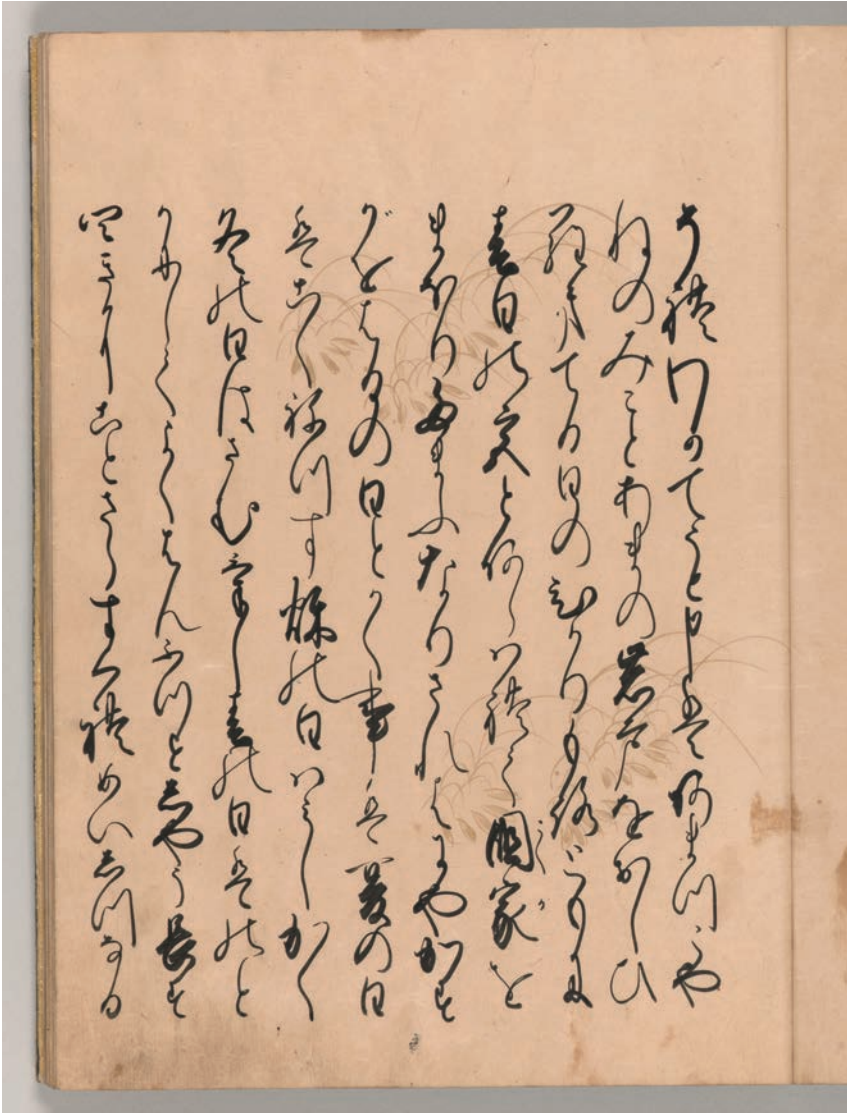
(上巻表紙見返し)



(遊紙才)



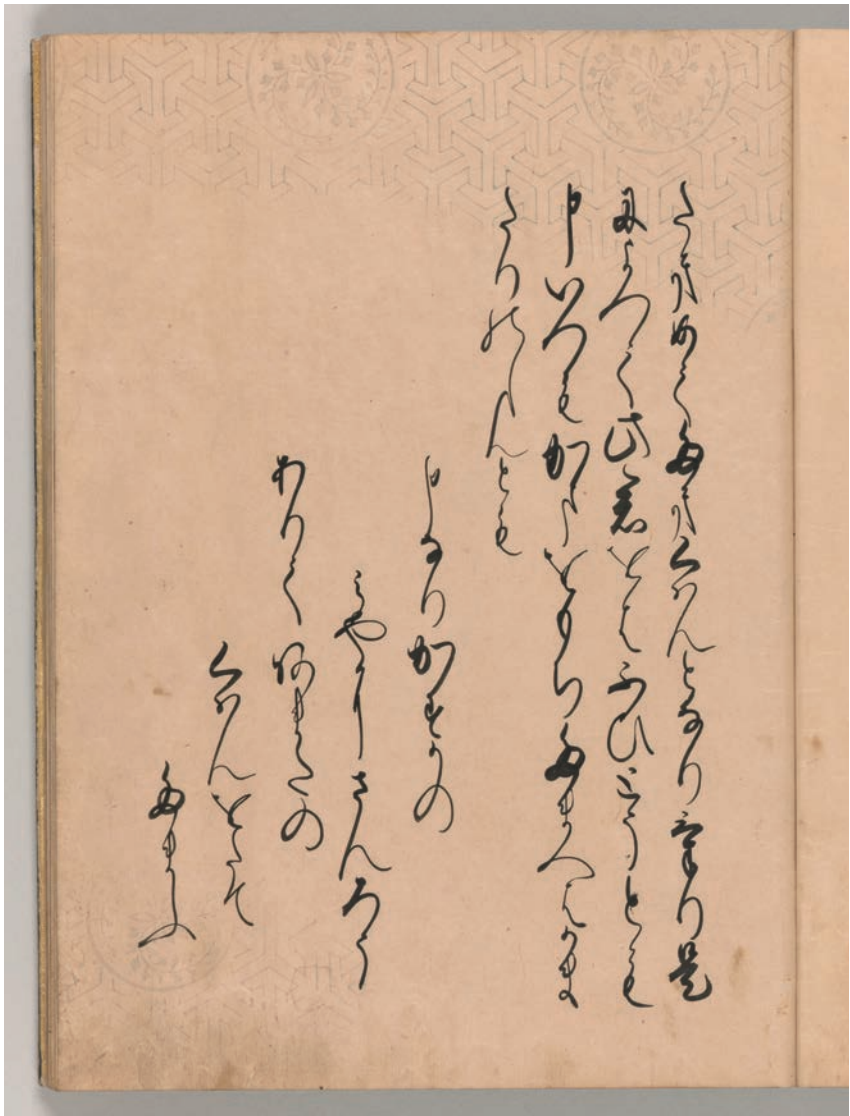
(遊紙ウ)



(一才)

みふらうくしらの口とつらそそまの
つらく切らうとるらまらりあや
まらしひそそあらうしそあらう
まらとあらうしそその中みあつ
あらんとあらうあらうあらう
たりはらうあらうあらうあらう
みらうあらうあらうあらうあらう
あらうあらうあらうあらうあらう
あらうあらうあらうあらうあらう

(一ウ)



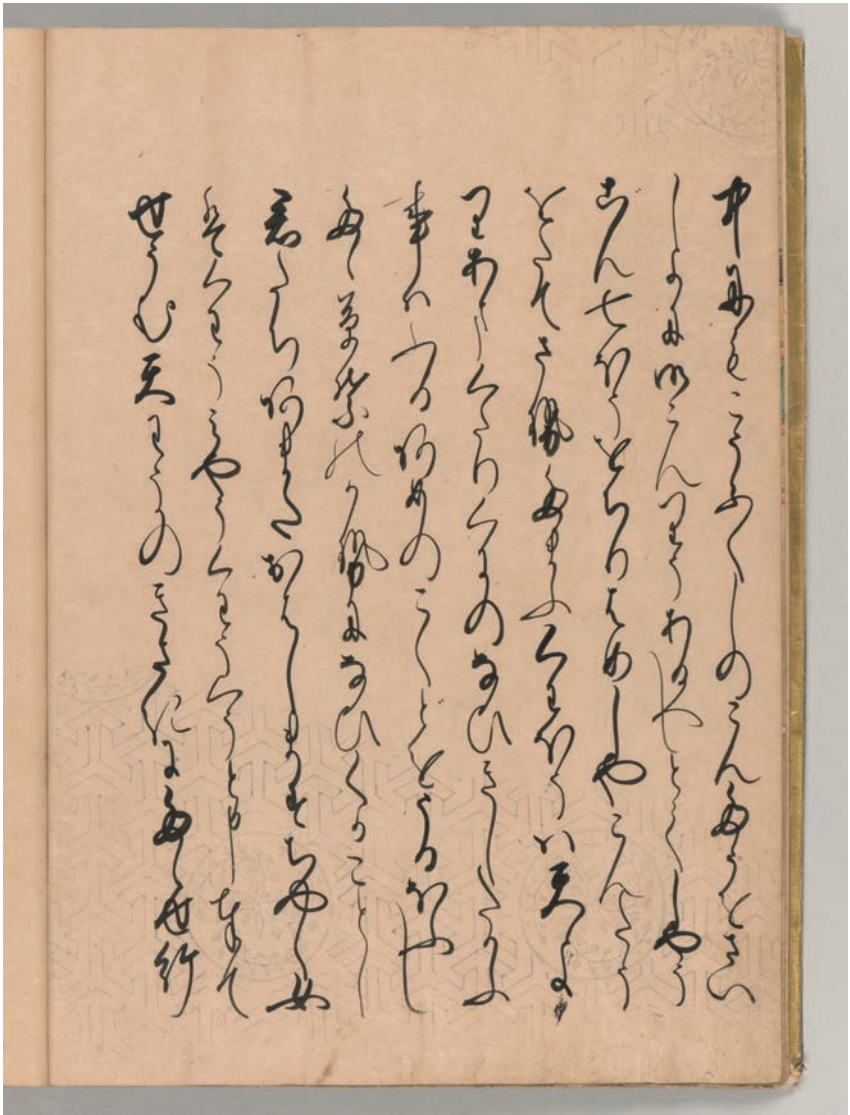
(二オ)



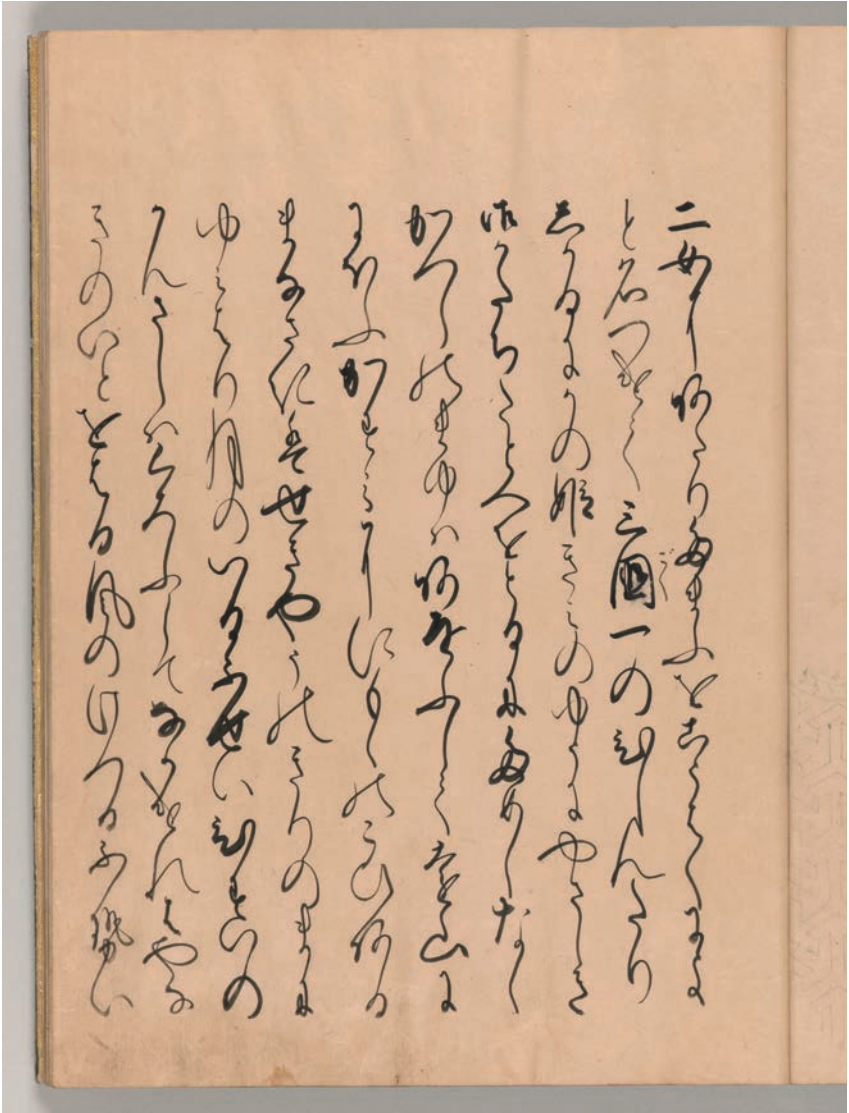
(二ウ)



(三才)



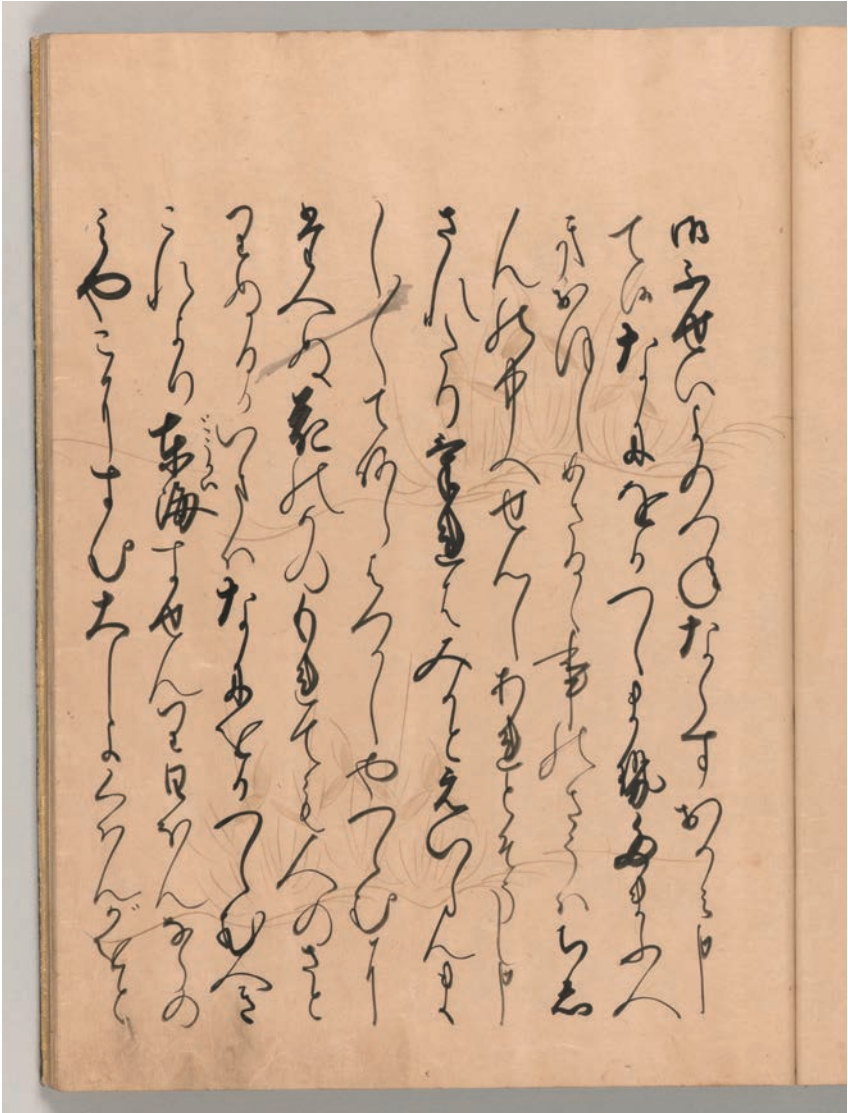
(三ウ)



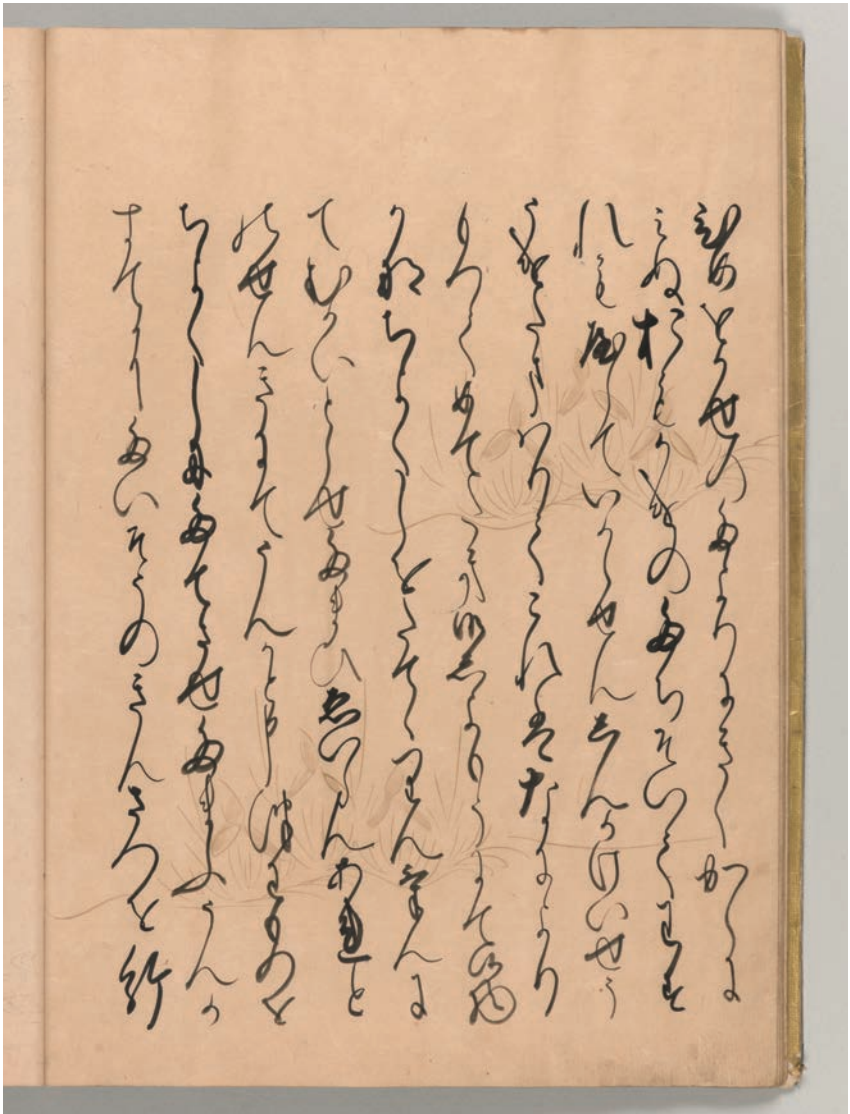
(四才)

みよとたり 卯すうこつ年二
なまのいふとすうこつ年二
るゆつたるいふとすうこつ年二
とすうこつ年二 せんとの北
しよくはんのいふとすうこつ年二
とすうこつ年二 せんとの北
とすうこつ年二 せんとの北
とすうこつ年二 せんとの北
とすうこつ年二 せんとの北

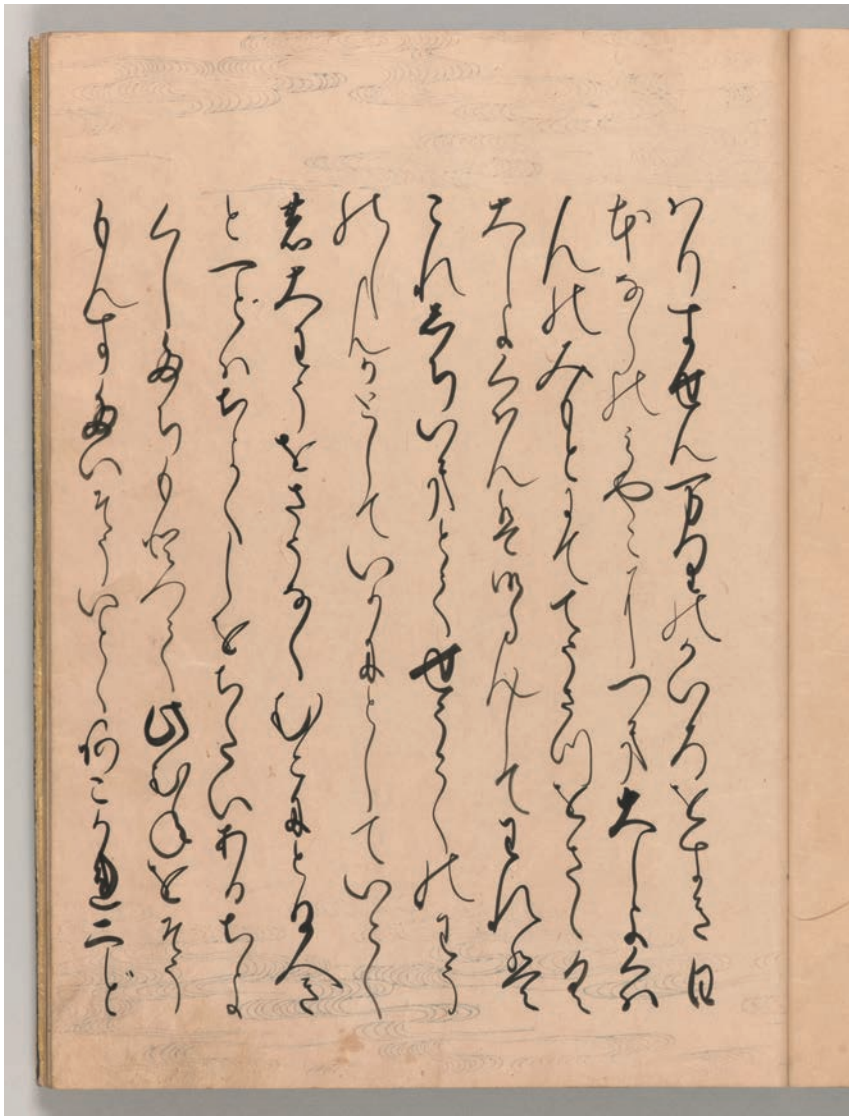
(四ウ)



(五才)



(五ウ)



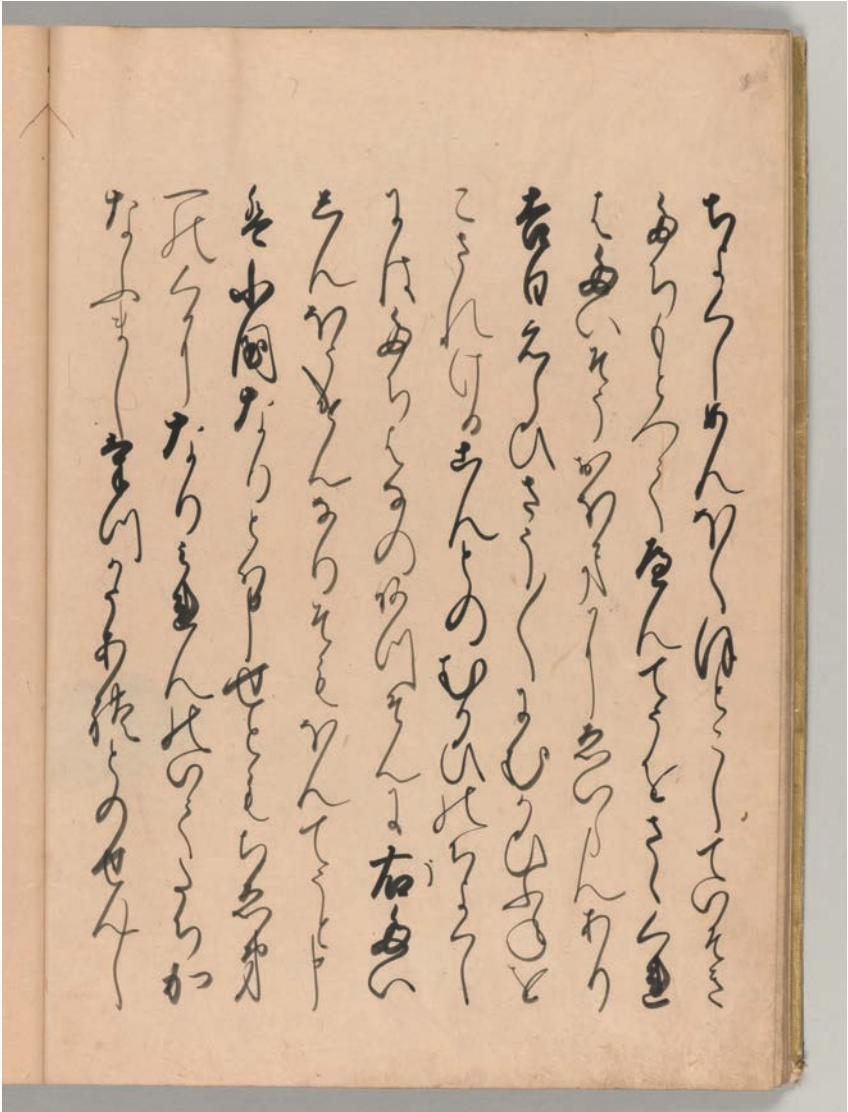
(六才)

わらわらとてあはれなるを
じつとていふものもあはれ
りよふとていふものもあはれ
みよふとていふものもあはれ
わらわらとてあはれなるを
じつとていふものもあはれ
りよふとていふものもあはれ
みよふとていふものもあはれ

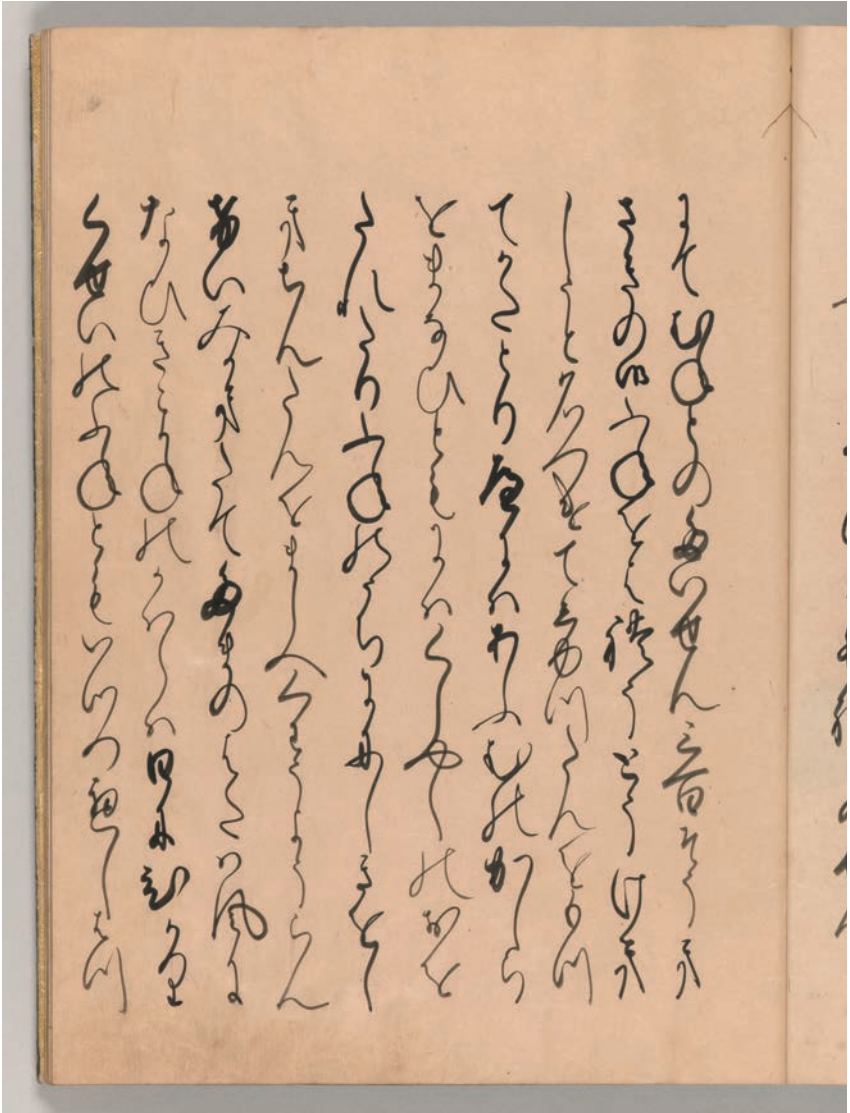
(六ウ)



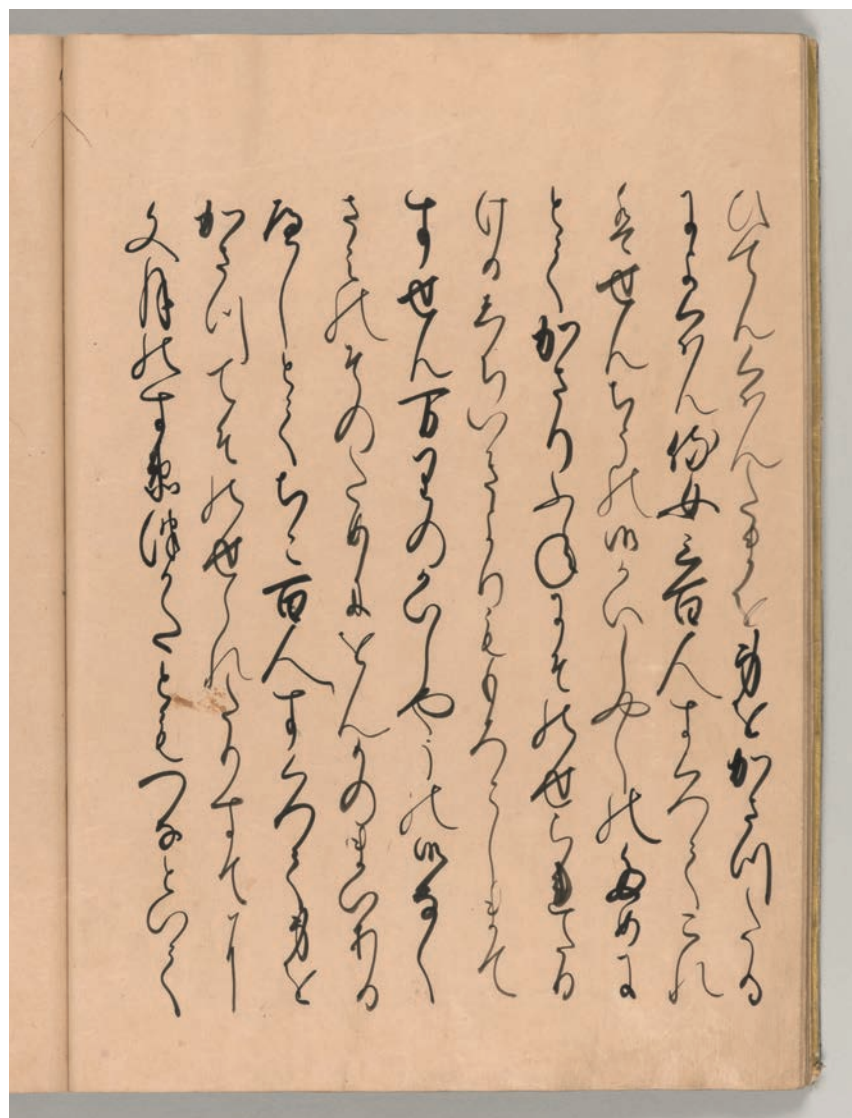
(七才)



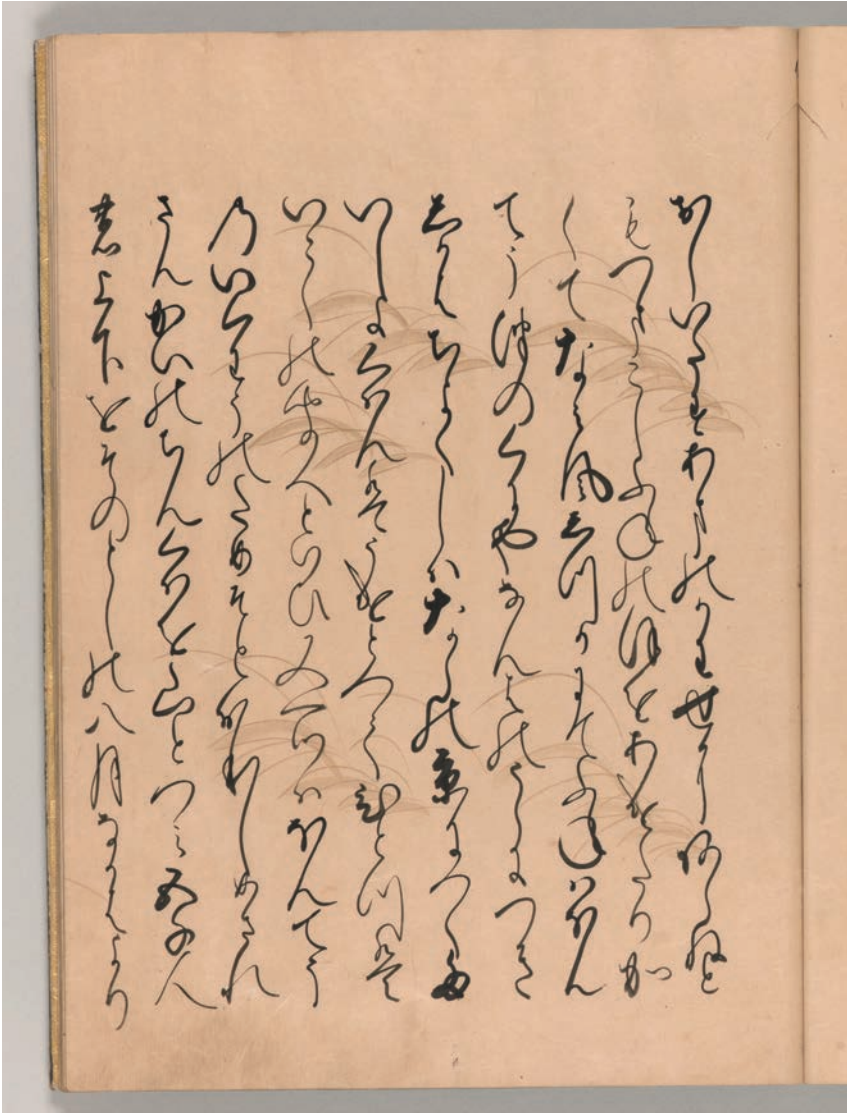
(七ウ)



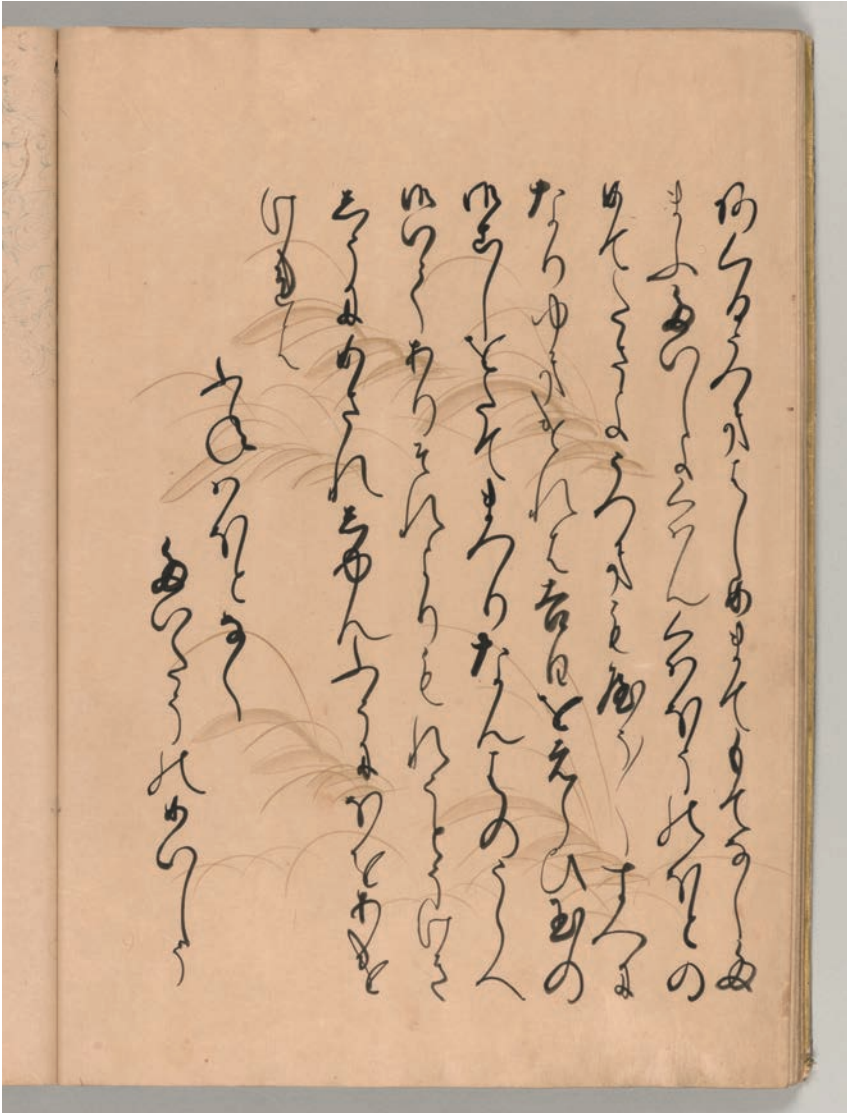
(八才)



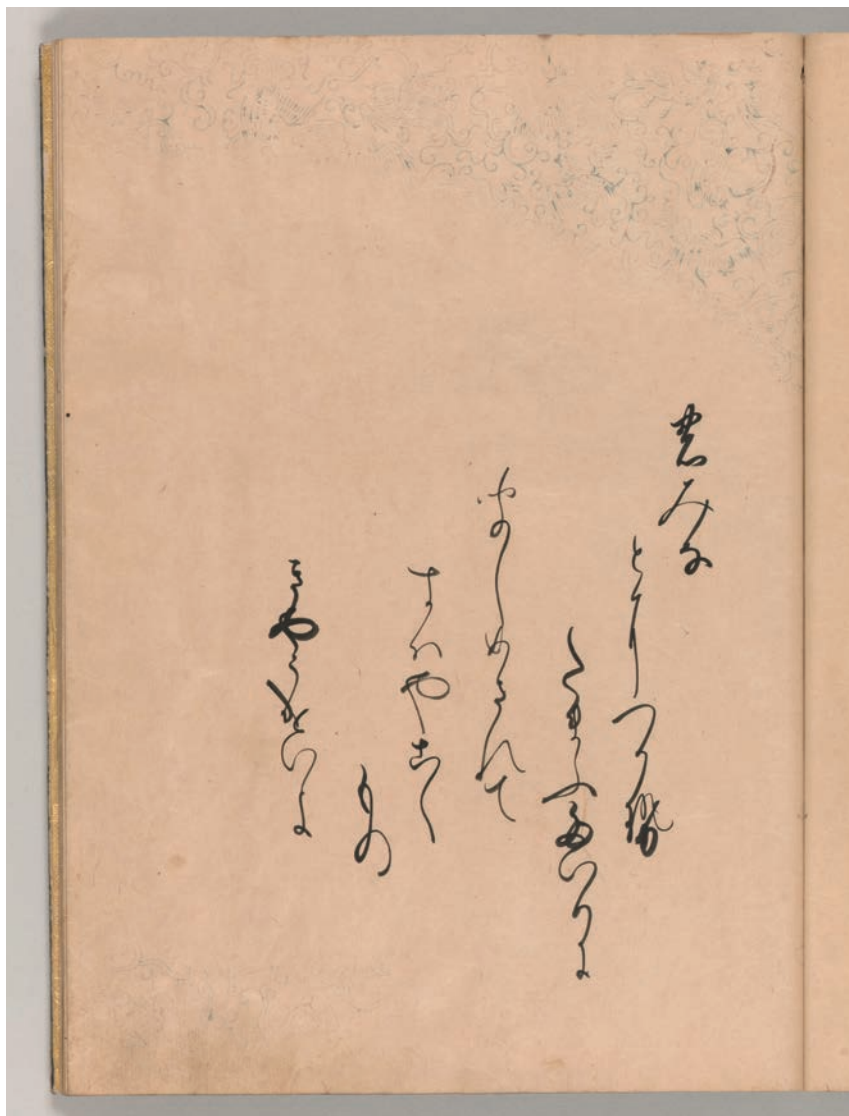
(八ウ)



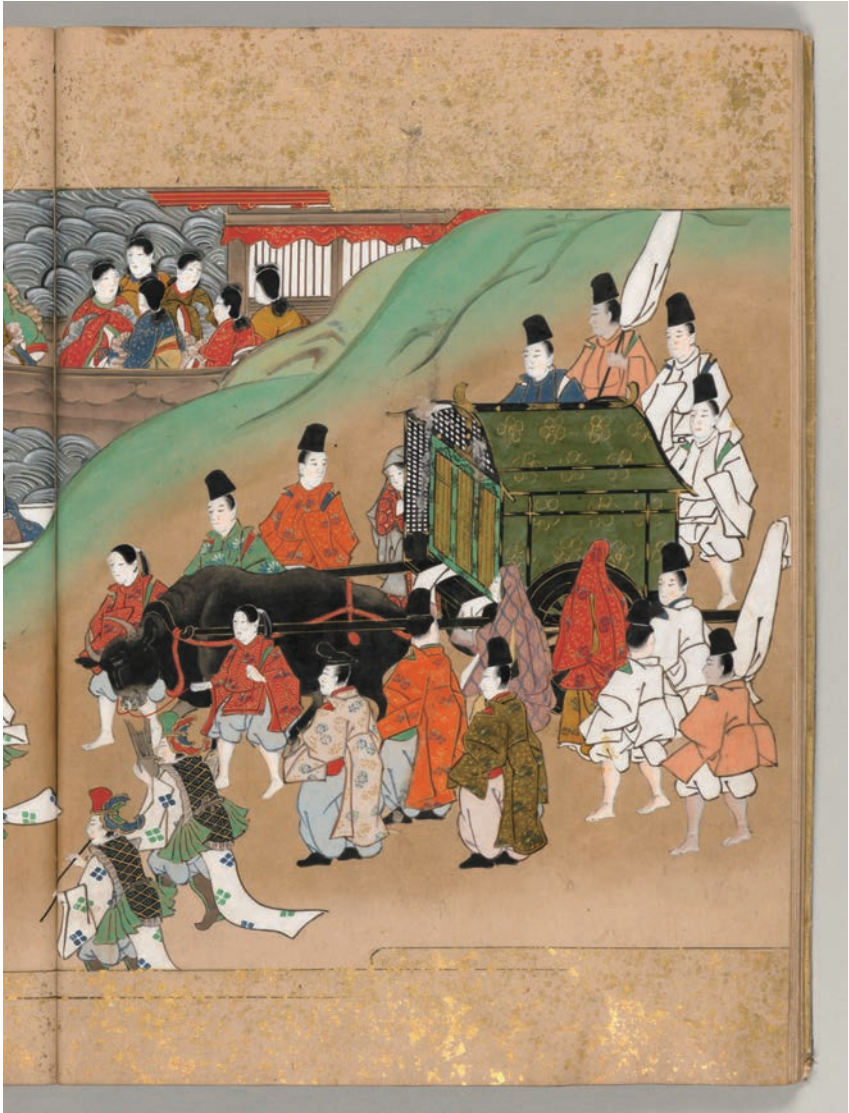
(九才)



(九ウ)



(一〇才)



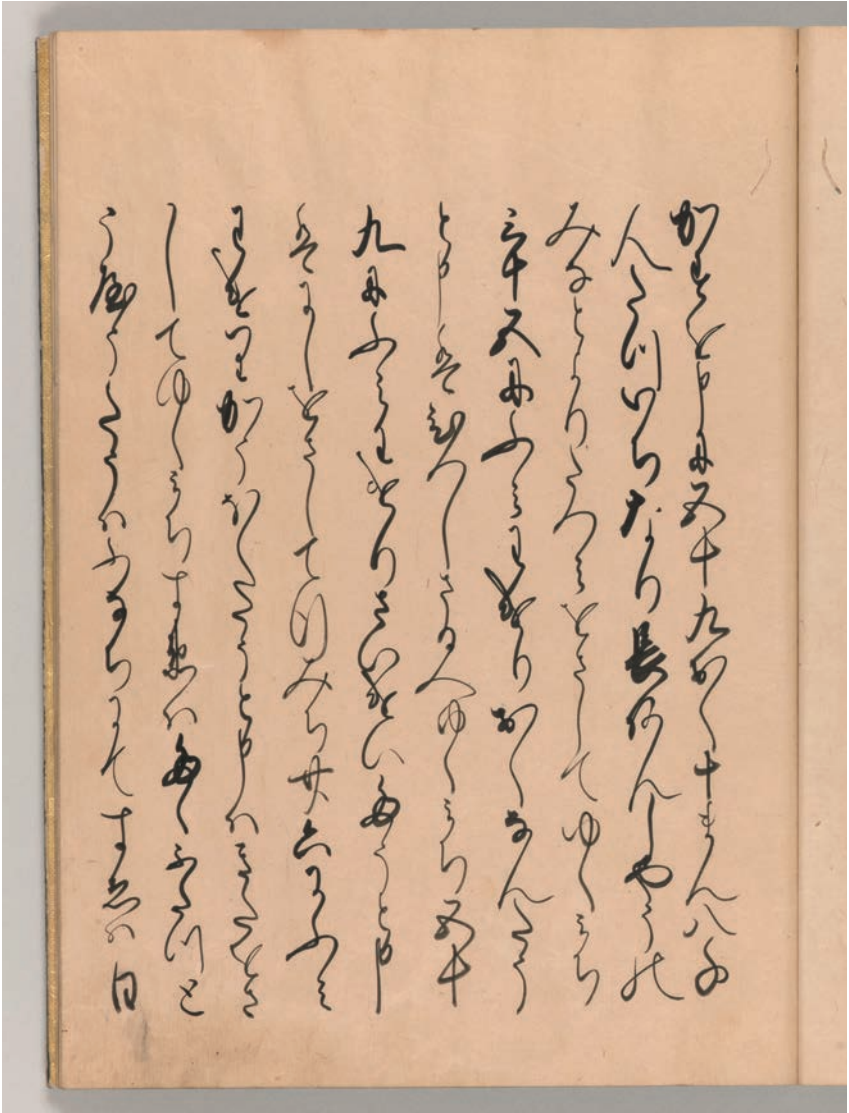
(一〇ウ)



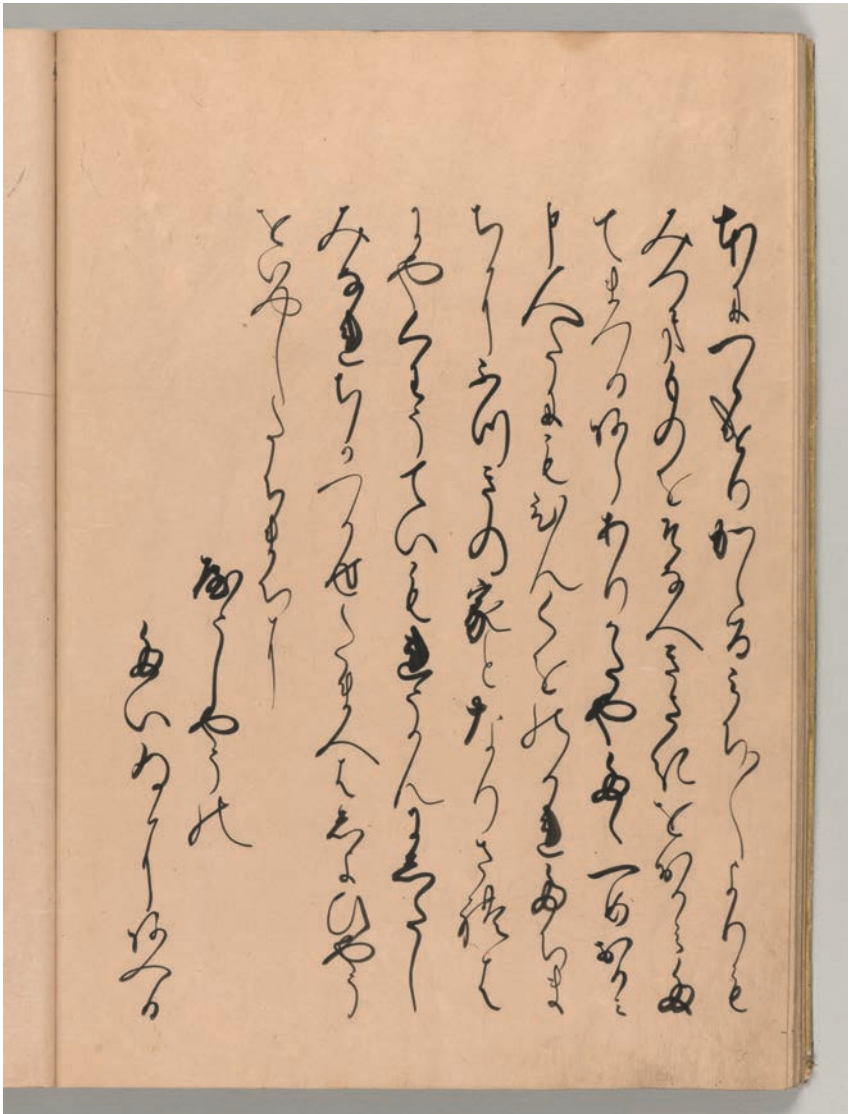
(一一才)

Handwritten text in cursive style (sōsho) on aged paper, likely a page from a manuscript. The text is written in vertical columns from right to left. The characters are highly stylized and difficult to decipher without specialized knowledge of the specific dialect or context. The paper shows signs of age, including discoloration and some staining.

(一一ウ)



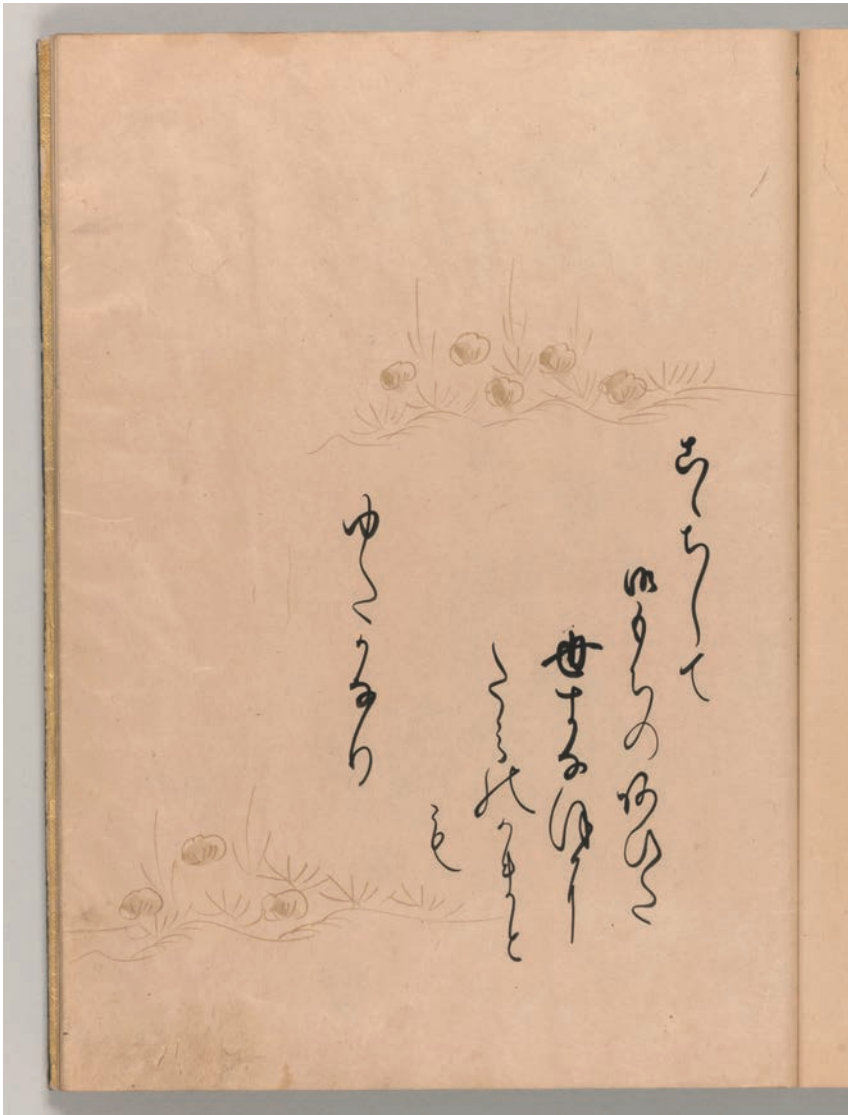
(一二才)



あつてはつちのちかぢきりて
 かくるゝのちかぢきりて
 てはつちのちかぢきりて
 かくるゝのちかぢきりて
 てはつちのちかぢきりて
 かくるゝのちかぢきりて
 てはつちのちかぢきりて
 かくるゝのちかぢきりて

あつてはつちのちかぢきりて
 かくるゝのちかぢきりて

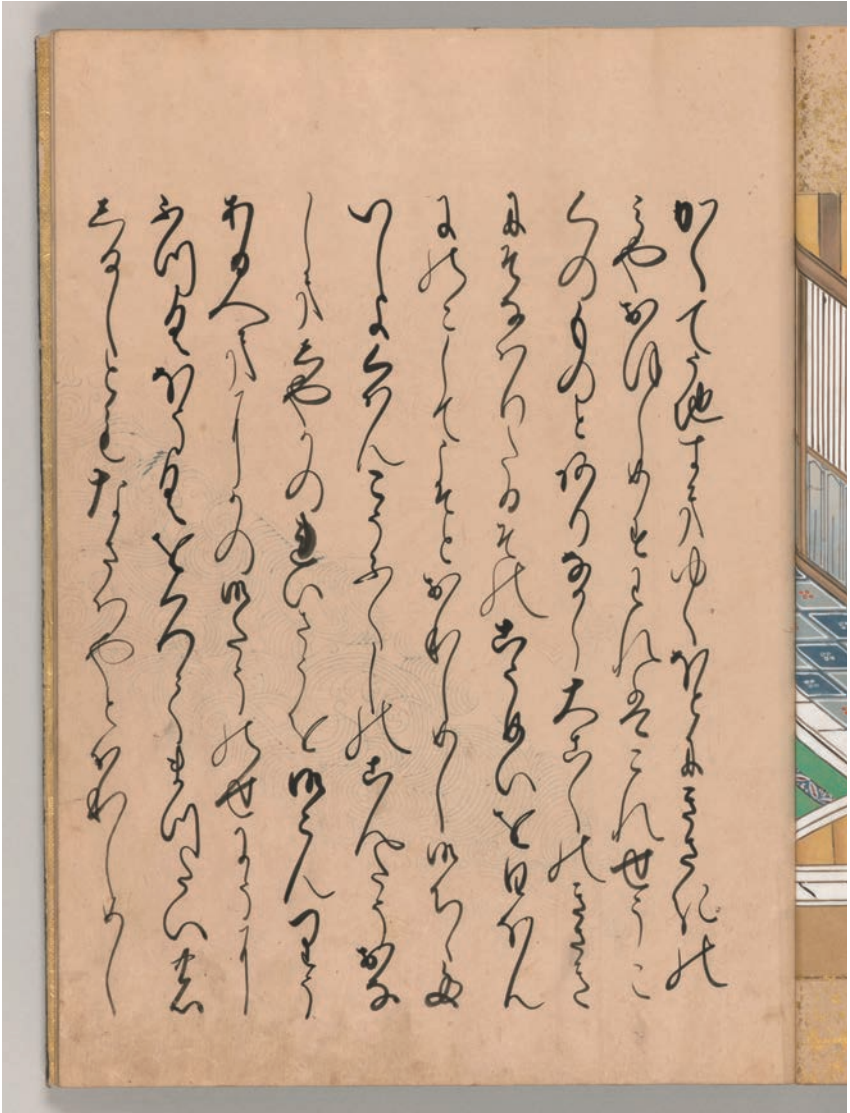
(一ニウ)



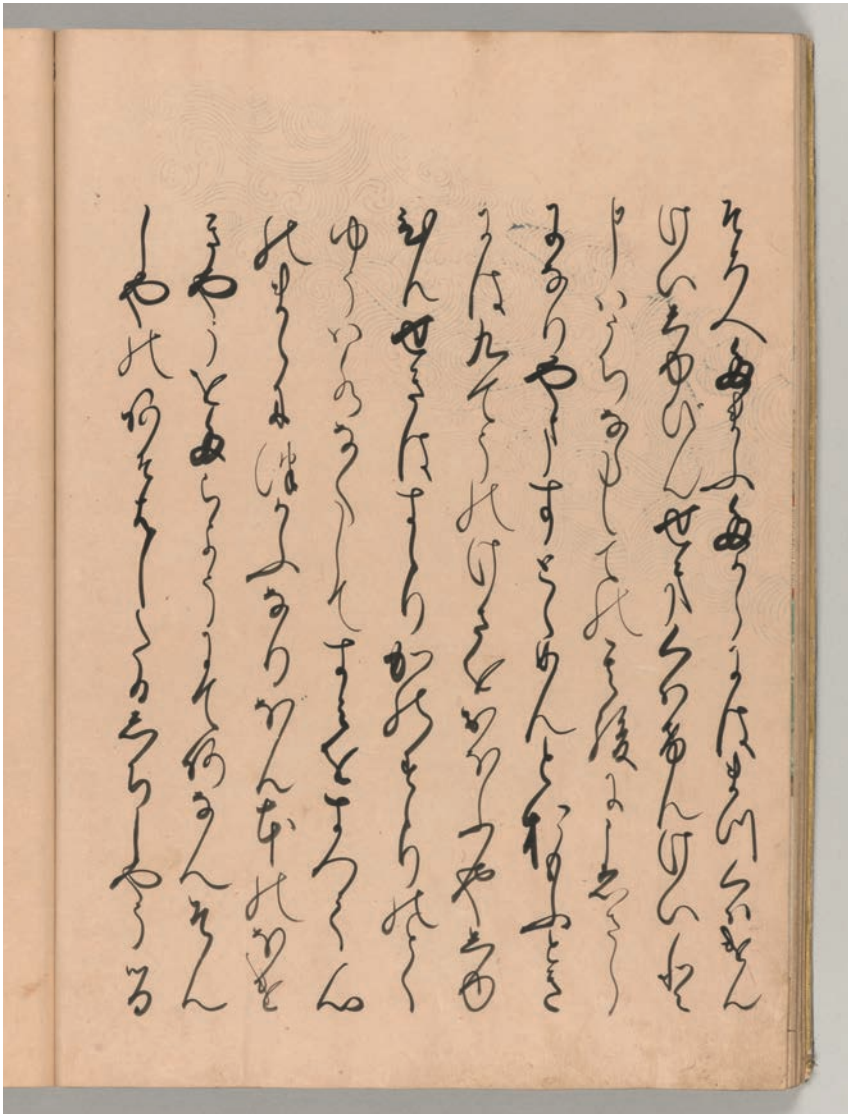
(一三才)



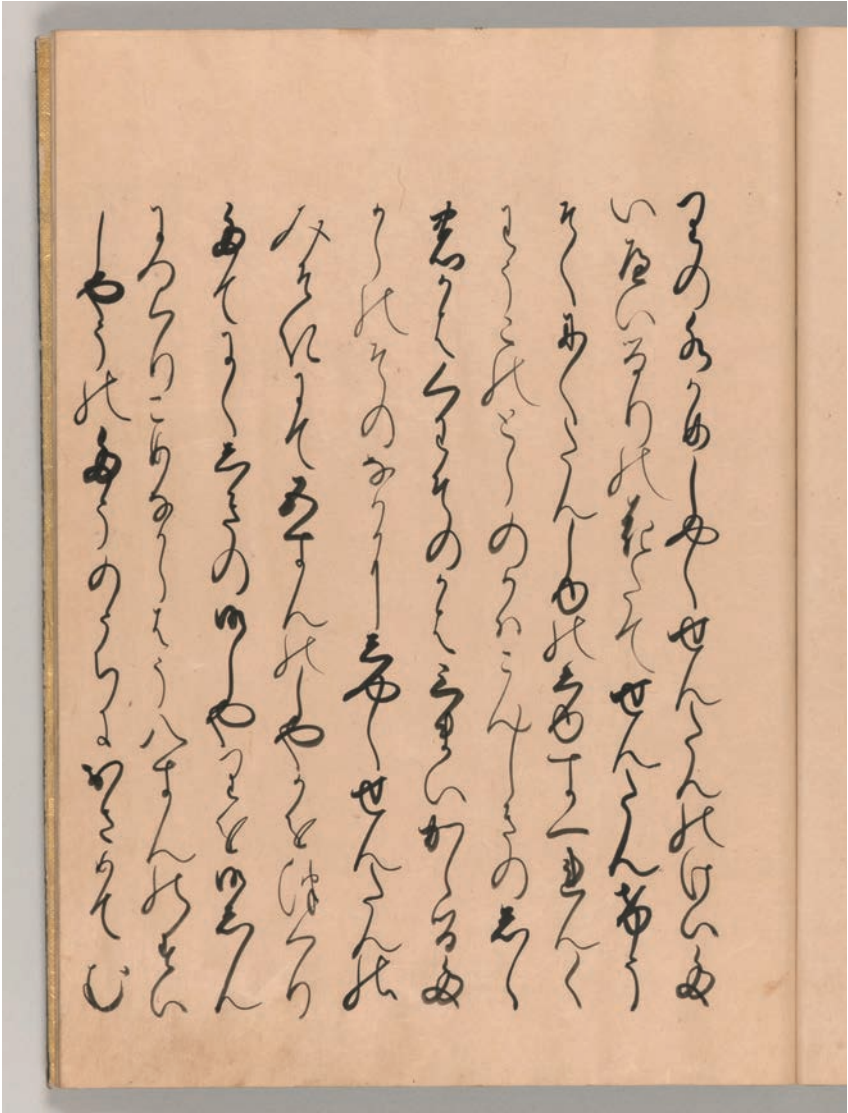
(一三ウ)



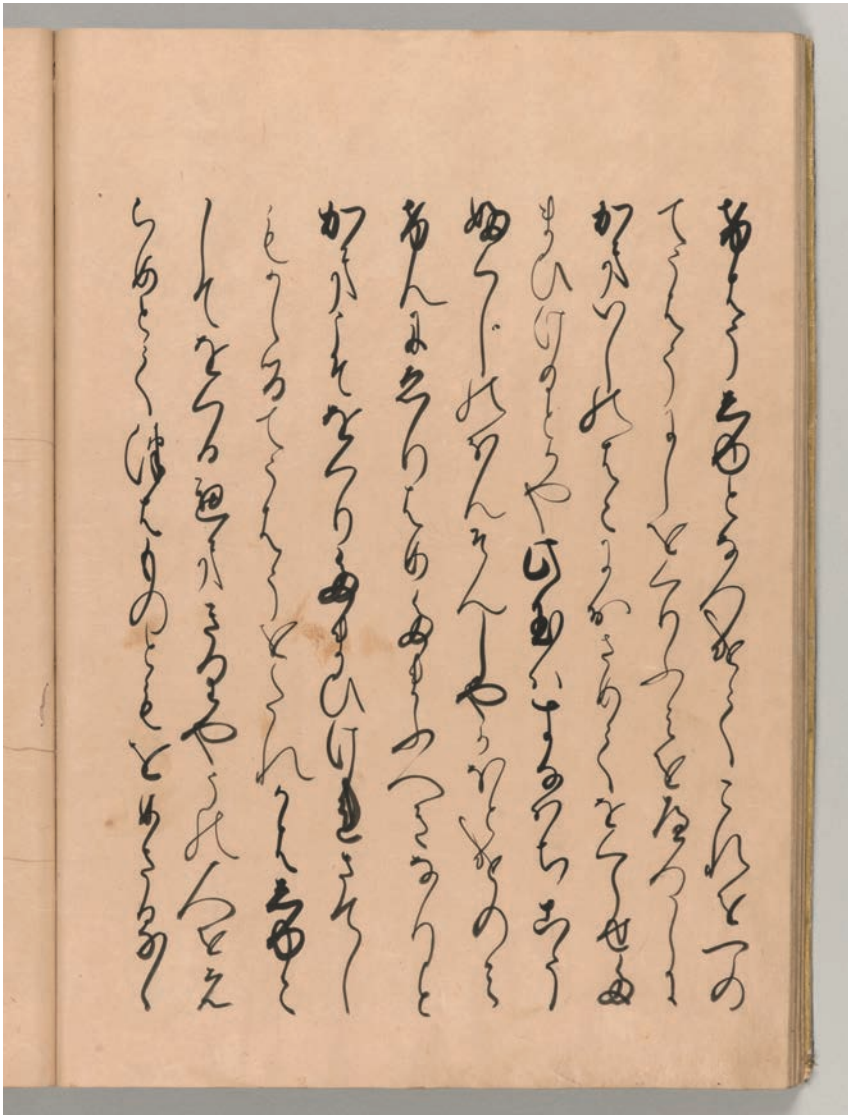
(一四才)



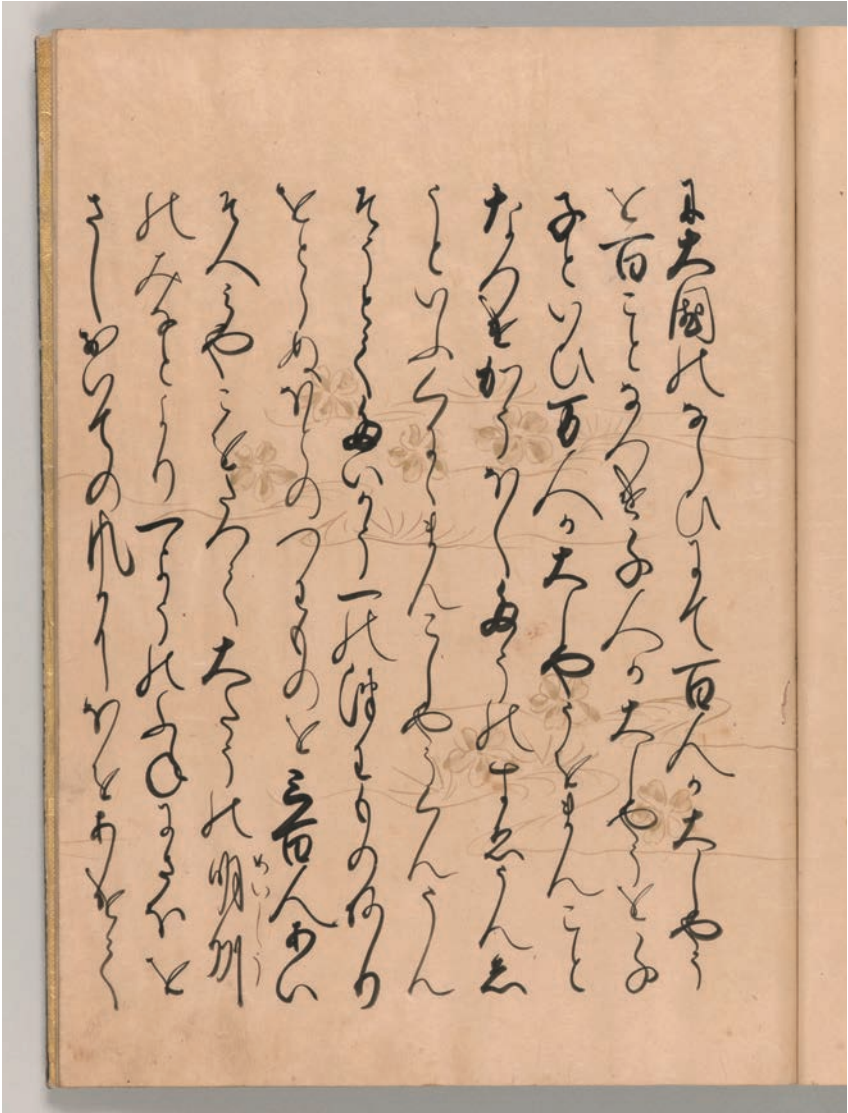
(一四ウ)



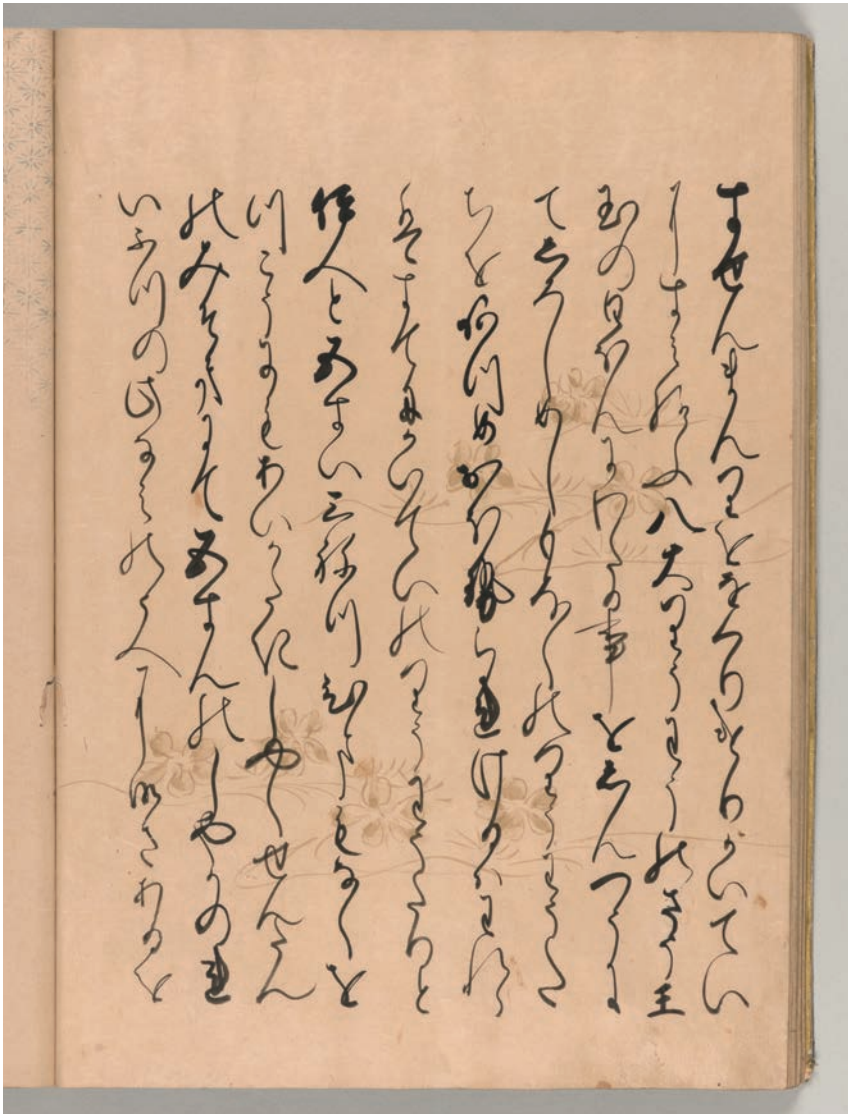
(一五才)



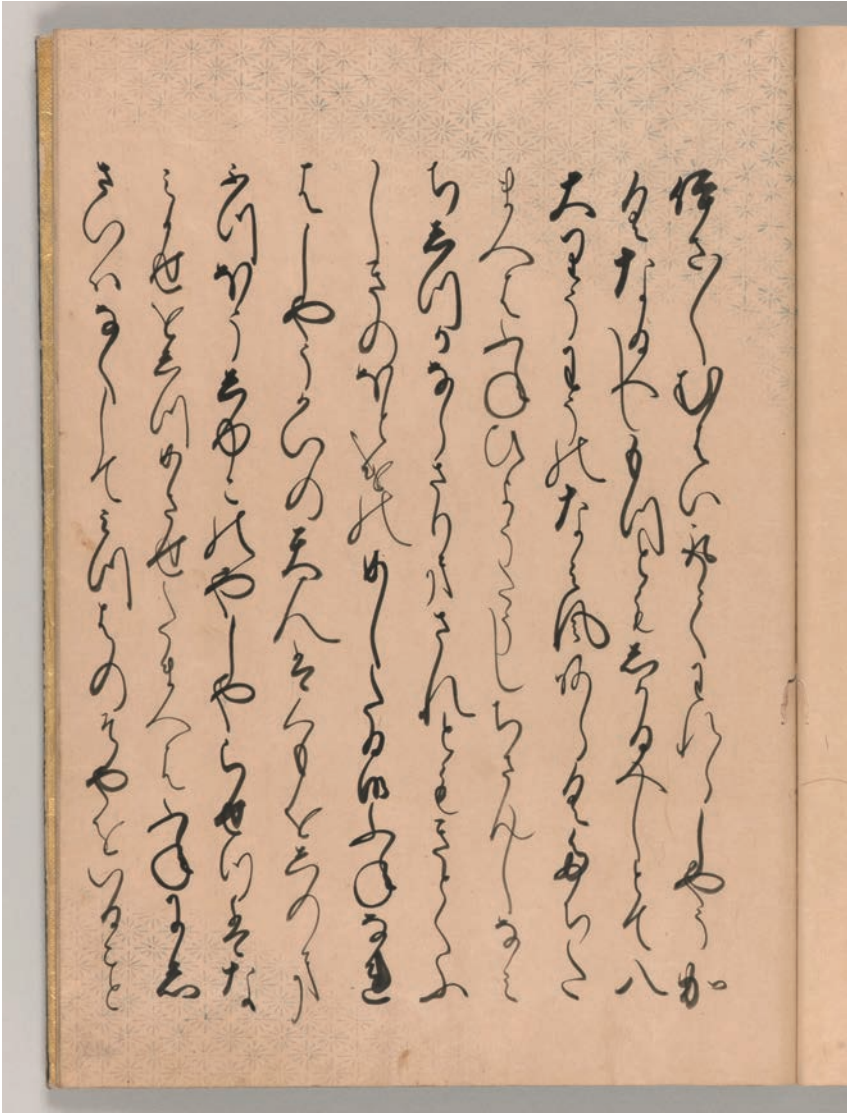
(一五ウ)



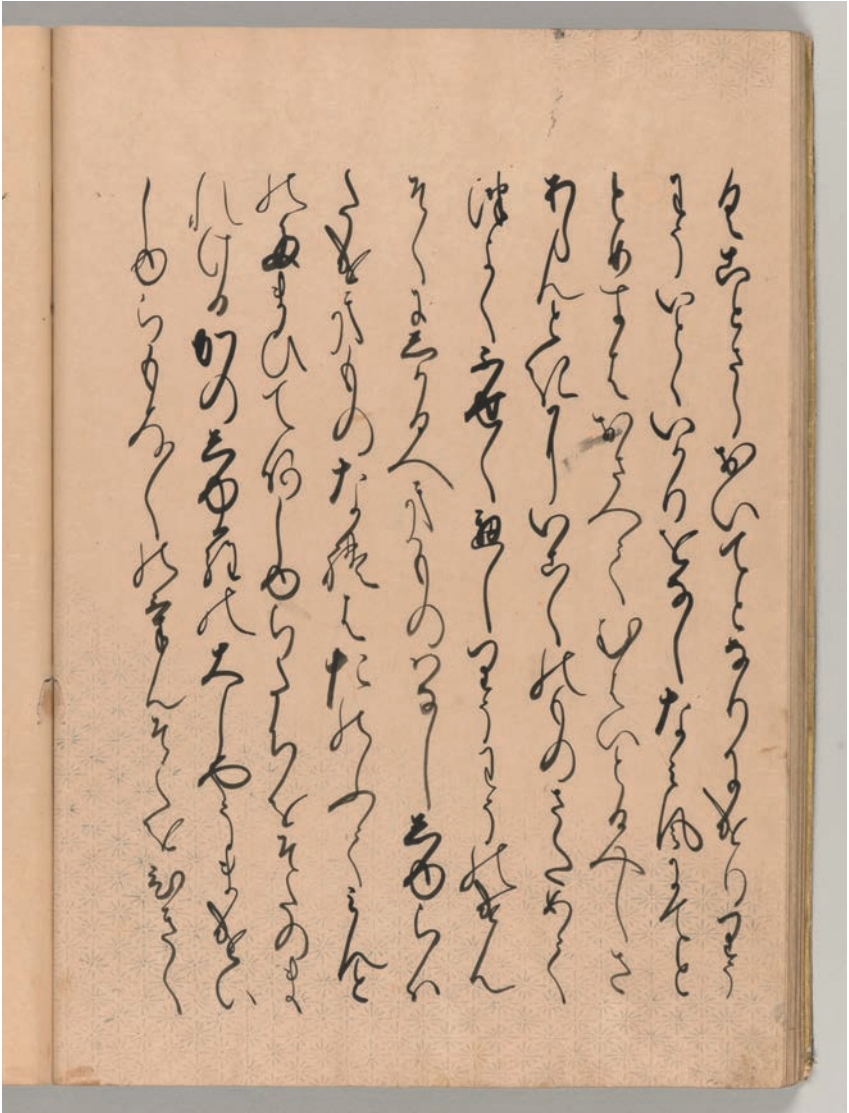
(一六オ)

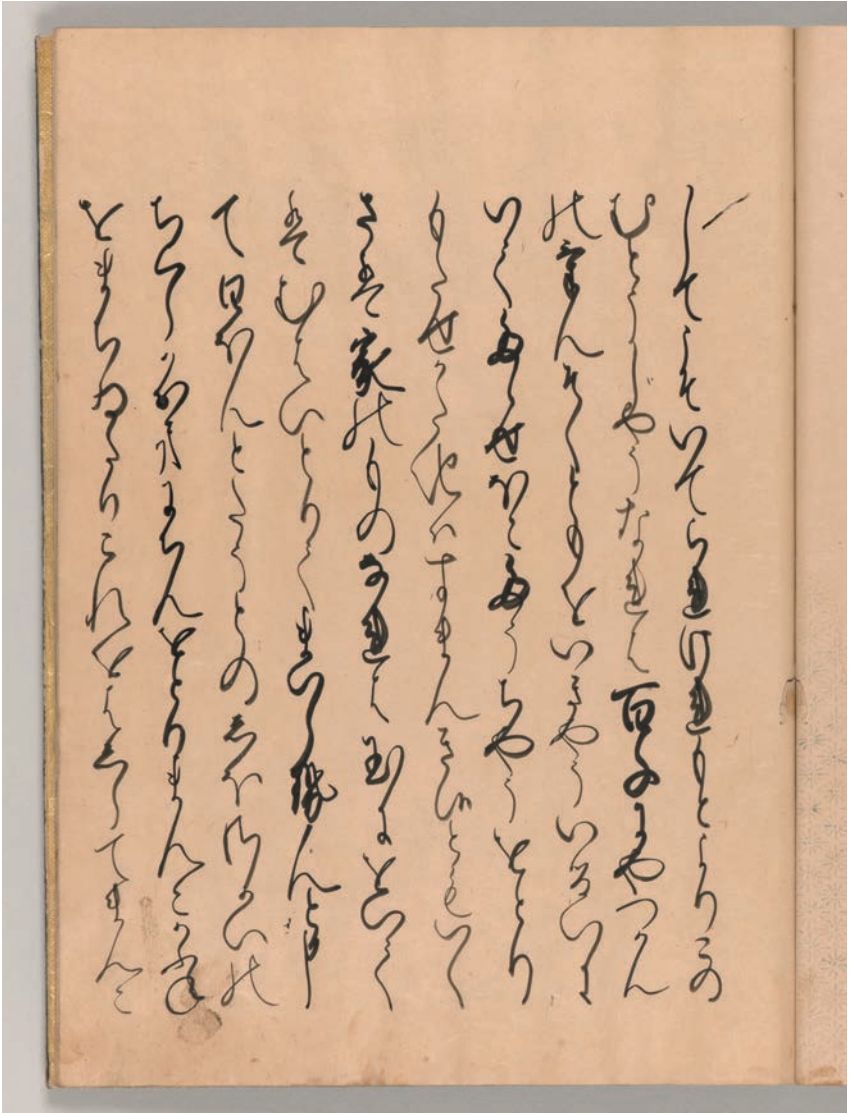


(一六ウ)



(一七オ)

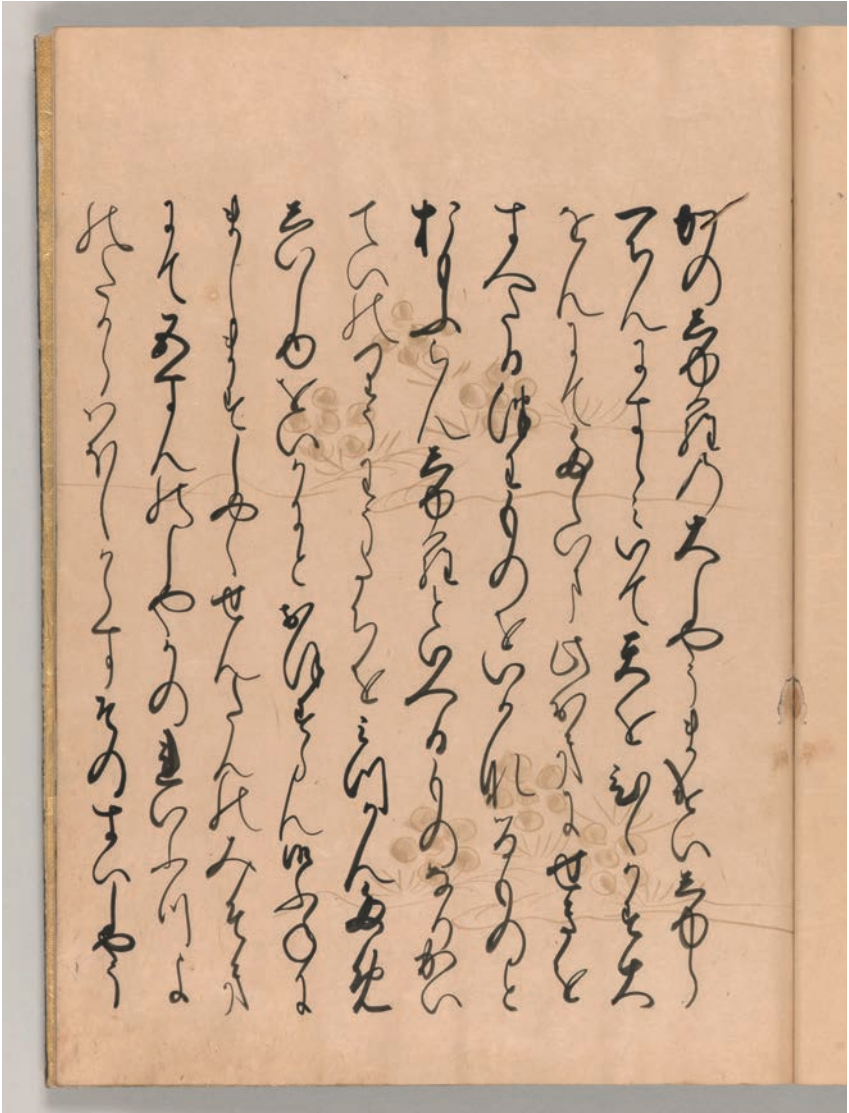




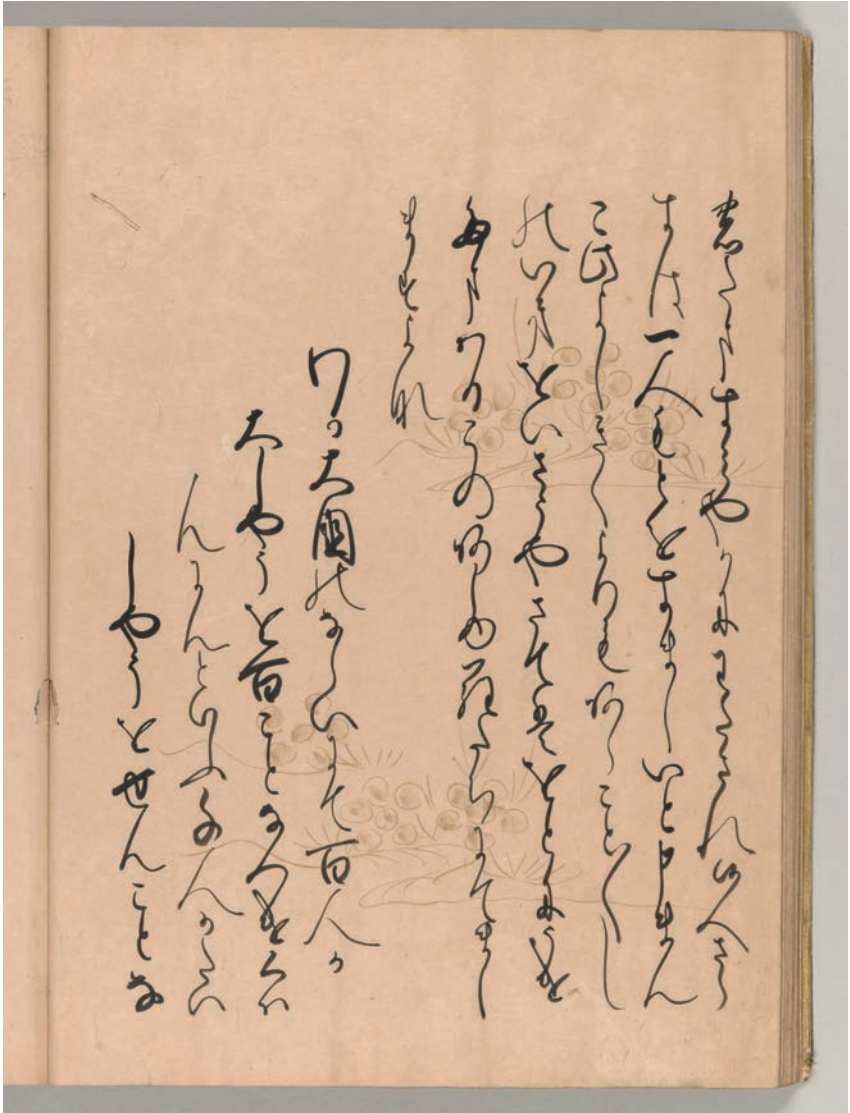
(一八才)

ちんううまうとわんごーしうう
てううあゆいよひあつてい
ぬまうまうしううううう
しううううううううう
わううううううううう
あううううううううう
ううううううううう
ううううううううう
ううううううううう
ううううううううう

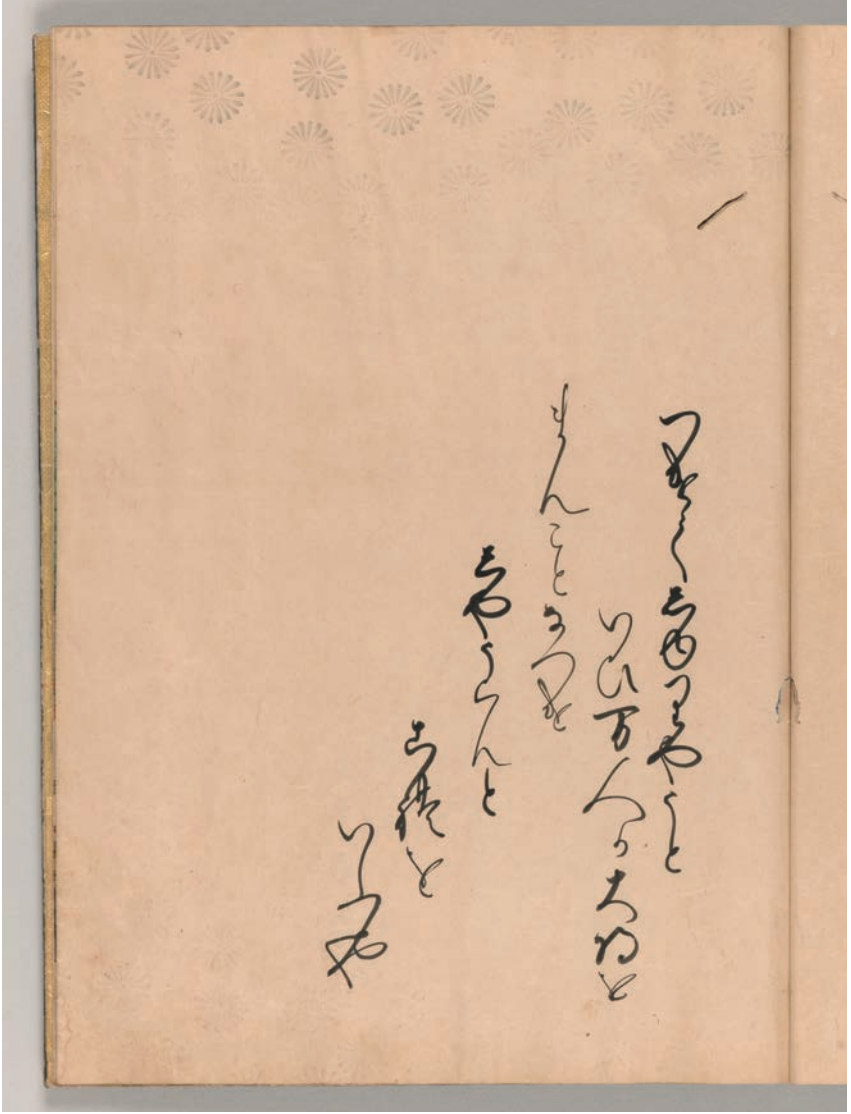
(一八ウ)



(一九才)



(一九ウ)



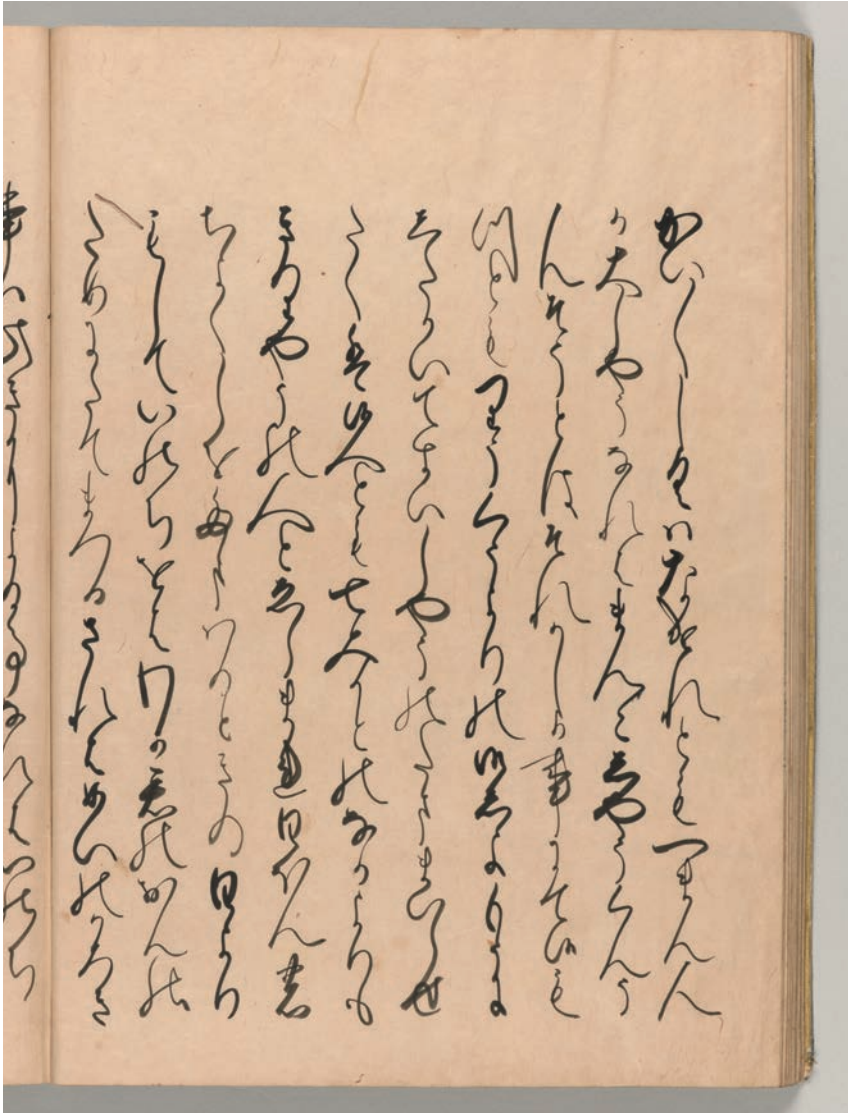
(二〇オ)



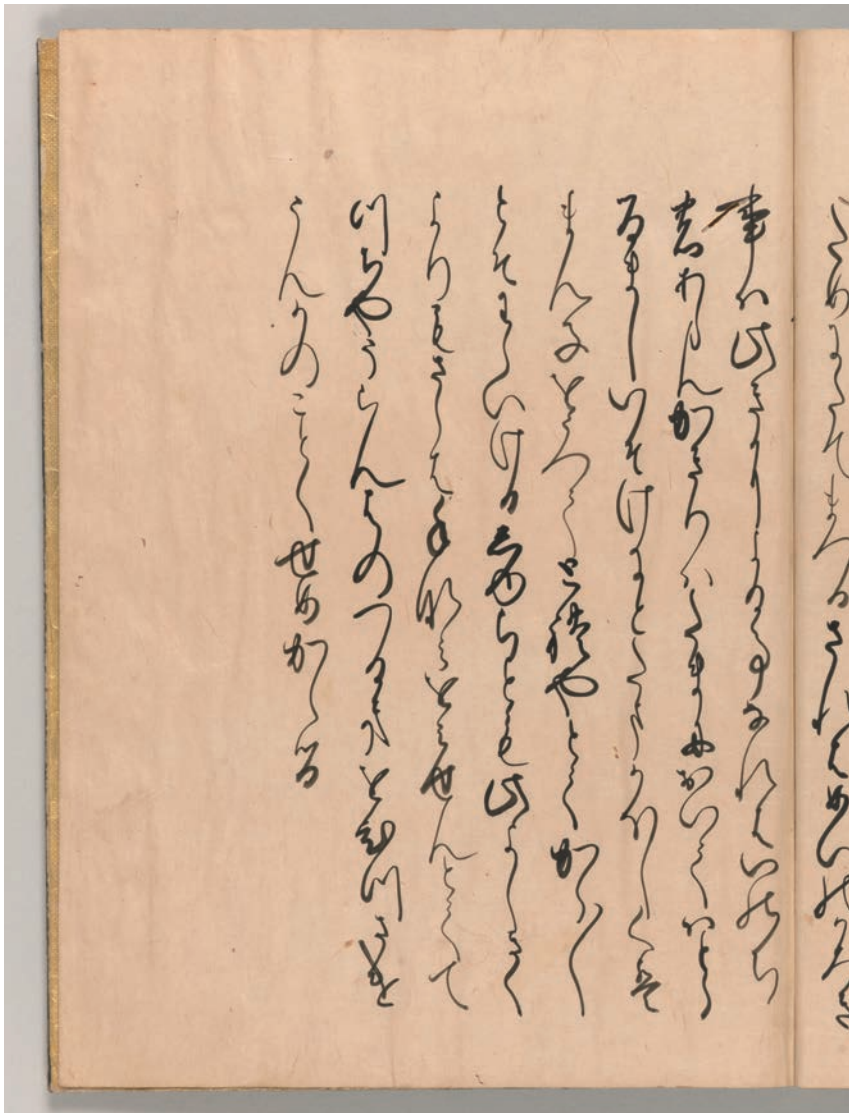
(二〇ウ)



(二一オ)



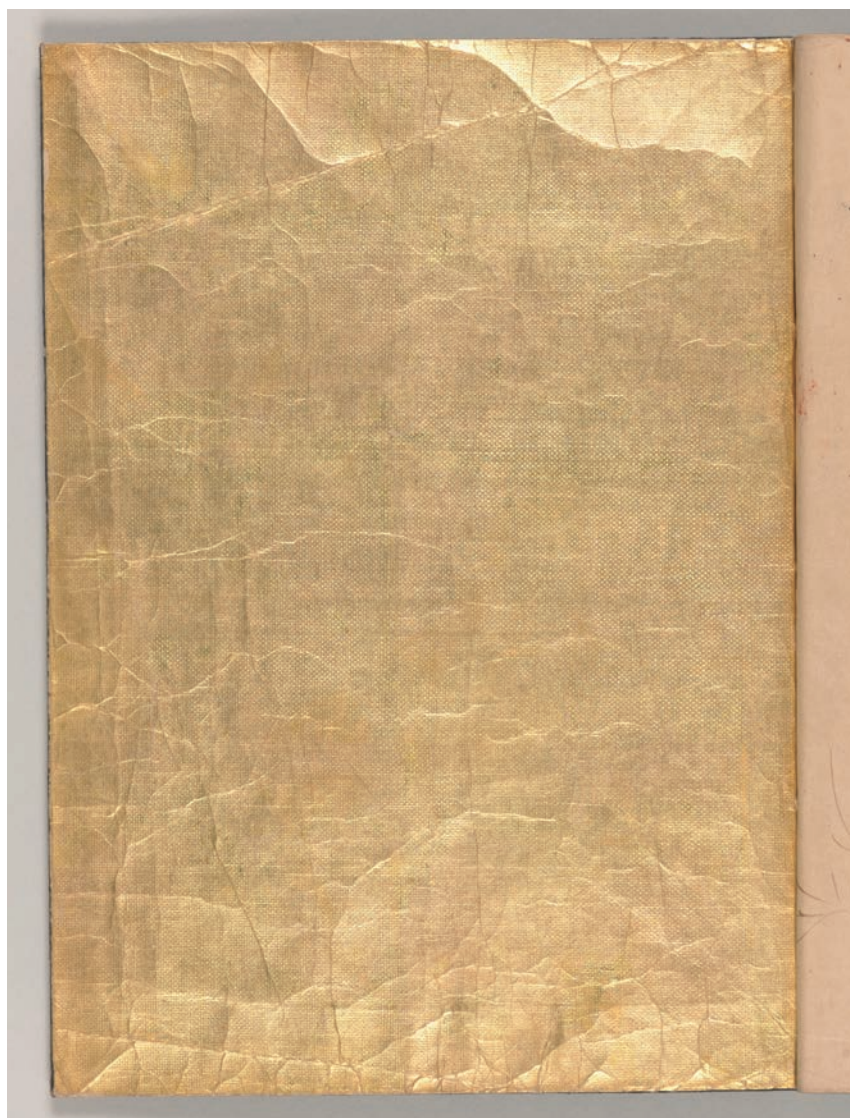
(二一ウ)



(二二オ)



(二二ウ)



(上巻裏表紙見返し)



(上巻裏表紙)

卷子本『太しよくわん』上巻影印



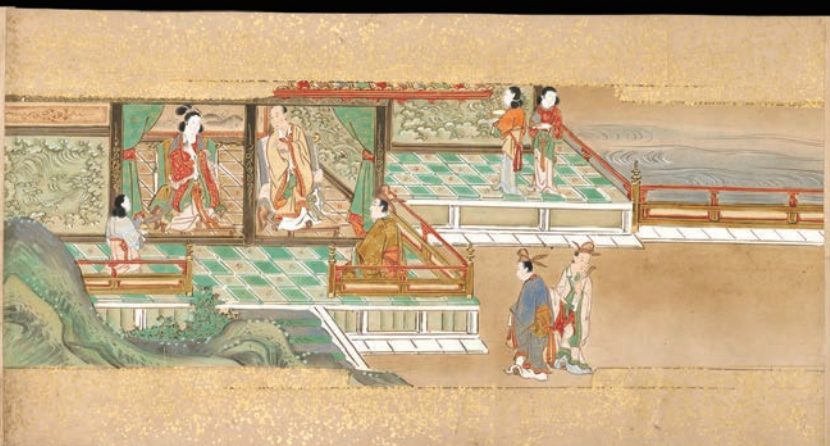




かねてしるしをよみしに
 かしらるるうつらなまは天住
 りやせんやうりなせりん
 一八小園やうりやうり
 才一のふなりやまのいそ
 のうやうりまうりやまのい
 しうりてしうりやまのい
 百やうりやまのい
 とやうりやまのい
 そんやうりやまのい
 うりやまのい
 いくやうりやまのい
 のうりやまのい
 そんやうりやまのい
 いみやうりやまのい
 さうりやまのい
 四のやうりやまのい
 らんやうりやまのい
 かやうりやまのい
 色やうりやまのい
 いてやうりやまのい
 ずやうりやまのい
 うりやまのい
 うりやまのい
 うりやまのい
 うりやまのい
 うりやまのい



わしそふふ船はうてまはひかた
けまりつらやうりしりしり
つきののこも人さまたたか
甘きわらわさそそ一りは
えりふふとひんたののり
まらよつらまのゆと成たて
わらうてらとせしうりんま
そふなをしらつらとまな
病をるしりしりふあう
しわのそりよらうらうり
てはねるるせとらかよそ
のうらとせしうりつて
しらうらうりしりしり
うまゆりしりしりしり
のこのりりりりりりり
ゆさよらりりりりりり
ゆいとゆいとゆいと
むりりりりりりりりり
らうらうらうらうらうら
松ののせしうらうらうら
うらうらうらうらうら
うらうらうらうらうら
のうらうらうらうら
らうらうらうらうら
きんらうらうらうら
うらうらうらうら
うらうらうらうら



下るつらこふゆ〜いかなる
 杖むり〜のるんまよえり
 りほろさせと〜とさつり
 めいん

な〜つ〜わ〜あ〜ひ〜る〜か
 ーや〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
 すがやうのせいのちのら〜る〜
 ふう〜り〜ひ〜た〜わ〜る〜つ〜さ〜く〜ひ
 ーい〜ん〜く〜み〜が〜や〜う〜ら〜ひ〜し
 ひ〜ら〜く〜く〜て〜ん〜ち〜ん〜み〜ん
 四〜わ〜れ〜も〜ま〜い〜る〜の〜ひ〜よ〜る〜こ
 り〜ら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
 ず〜ら〜さ〜か〜も〜さ〜つ〜ら〜う〜さ〜あ
 り〜ん〜の〜り〜り〜り〜り〜り〜り
 ち〜ろ〜う〜の〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
 わ〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
 な〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
 は〜い〜ぬ〜が〜く〜し〜て〜あ〜ら〜あ〜の〜わ
 ーを〜ら〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く〜く
 少〜き〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り〜り
 手〜か〜を〜風〜り〜て〜さ〜め〜を〜ぬ
 ざ〜ん〜し〜し〜い〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
 は〜あ〜國〜の〜と〜し〜さ〜め〜て〜ほ〜く〜
 ぬ〜を〜く〜へ〜い〜つ〜つ〜つ〜つ〜つ〜つ
 け〜り〜ら〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
 ら〜い〜を〜け〜さ〜さ〜の〜ち〜れ〜ん〜の〜ん
 て〜ん〜ん〜の〜ま〜ま〜ひ〜て〜あ〜わ〜ら
 ぞ〜ら〜な〜と〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま
 け〜の〜ち〜ね〜ま〜い〜る〜ま〜わ〜ら〜く
 う〜き〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん〜ん
 あ〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま〜ま



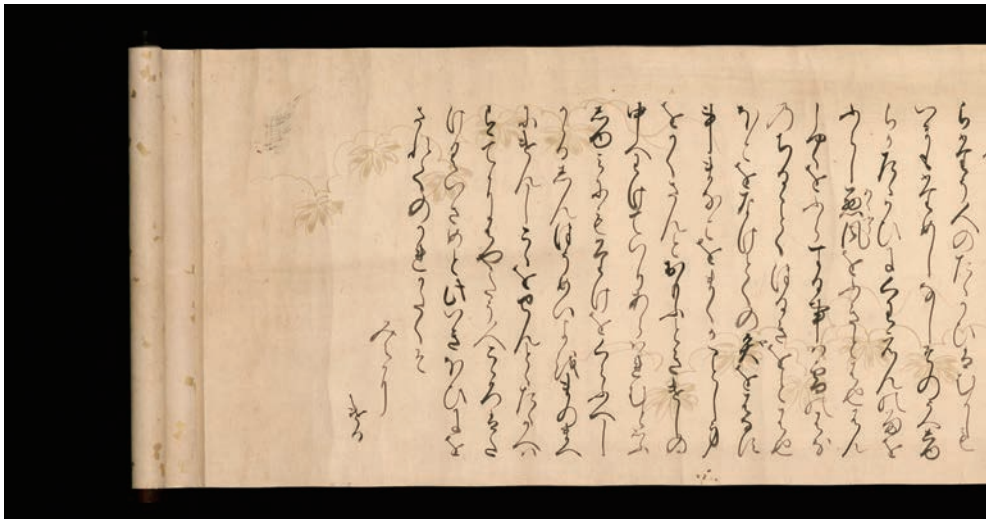
なりつひくまのしなはせし
一百人ふたやふきはまんね
らんらんをうらなわたりし
いそむむうらうらの門本
らまうさうしてまわやれな
まうやそくまんと七門の
つりもさうまんとえま
世目やんをいそはつるま
りりりりりりりりりりり
のりんのまめよなてつる
しりのりりりりりりりり
中しなせしりりりりりり
とむよあつていりりりりり
えまふそりりりりりりり
る

うらうら
うらうら
うらうら
うらうら

ちやうとていりりりりりり
りりりりりりりりりりり
らうらうらのりりりりりり
けんのりりりりりりりり
こまむてりりりりりりり
せつうかきよはつていりり
きりりりりりりりりりり
目のりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりり
わてりりりりりりりりり
さるんらんらんらんらん
とららりりりりりりりり
てありりりりりりりりり
のりりりりりりりりりり
よままんれりりりりりり
小つとまよ大そりりりり
けりりりりりりりりりり
さけりりりりりりりりり
てりりりりりりりりりり
りりりりりりりりりりり
いりりりりりりりりりり
とりりりりりりりりりり



てあつくるを二ふり二つと
 のみねうやとぬらひいふこゝろ
 のいりやとをりたりまらぬ
 ままきんぬ入るゝるよすま
 小つとまうは入るゝるまんま
 けりまわしをうふしをんて
 ふけんとやまけんらふりあ
 てうひのつひまはちそらあ
 かり二つよ人のつゝまのま
 しひくまあまてううひあ
 をうんまてまうけんま
 つまりそまのつゝれまひよ
 てみまはうろりまつりせ
 一とまのつゝまうけつ
 わもてうひいひまう入るゝ
 ちんまうくまうてうひ
 まうそらまうまうくま
 かりひまうまうそらま
 てうらつてうらりらんで
 ひまれまはひつてうらま
 かりまうまのせんま
 まうつてうらまうま
 まうまうまうま
 四つまうまうま
 へまうまうまうま
 らまう人のたうひまう
 つままうまうまのま



立正大学古書資料館蔵『大織冠』

書誌・冊子本（上巻）翻刻・注・校異

立正大学古書資料館蔵

『大織冠』書誌・冊子本（上巻）翻刻・注・校異

〈書誌〉

冊子本（函架番号913.41_Ta24_1-3_02）

書型 大美濃本、袋綴三冊。29.9 cm × 22.4 cm。

表紙 紺紙金泥下絵表紙（雲形と草木を描く）。

題簽 左肩無辺金泥裝飾料紙。

「太しよくはん^上（^中下）」と墨書。

見返し 金箔地布目料紙。

料紙 斐紙。金泥で草花や流水を描く他、花紋繋

ぎ、唐草繋ぎ、桐花紋散、等を藍色で摺る。

写式 無辺無界。每半葉一〇行一五字内外。

字高 22.8 cm（上巻一行目「それゝこや」）。

丁数 上巻、全三三丁（扉一丁、墨付二二丁）。

中巻、全三三丁（扉一丁、墨付三二丁）。

下巻、全一九丁（扉一丁、墨付一八丁）。

備考 画者・筆耕ともに未詳。江戸時代前期写。

卷子本（函架番号913.41_Ta24_1-3_01）

書型 卷子本三巻。紙高17.2 cm。本紙の長さ、

上巻約7.6 m、中巻約8.5 m、下巻約

7.2 m。

表紙 草色地金糸唐草模様布表紙

題簽 無辺金泥裝飾料紙。

「太しよくわん^上（^中下）」と墨書。

見返し 金箔地布目料紙。

料紙 斐紙。金泥で雲形や草花を描く。

写式 無界。一行一三字内外。

字高 13.8 cm（上巻一行目「それゝねの」）。

備考 画者・筆耕ともに未詳。江戸時代前期写。

〈凡例〉

翻刻にあたり、変体仮名読解学習の便に供するため、濁点、改行は原文通りとし、変体仮名は通行の平仮名に、異体字は通行の字体に改めた。合字の「こそ」「こと」「こゑ」は、それぞれ「こと」「こそ」「こゑ」とし、また、原本の各丁片面の終わりに当たるところ

に「」をつけ、（ ）内にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。なお、適宜、句読点を補い、漢字でルビを付した（平仮名のルビは原本にあるルビである）。注は、最小限にとどめた。内容についてより深く学習するためには、「はしがき」で参考文献に挙げた『新日本古典文学大系59 舞の本』を参照されたい。

校異は、立正大学古書資料館所蔵の冊子本に対し、同館所蔵の卷子本、並びに寛永版本（『新日本古典文学大系59 舞の本』所収本文に拠った）とを対校し作成した。ただし、脱字、脱文、異文と判断した箇所のみにつき、仮名遣いと漢字の宛方の相異には及ばなかった。

（参考）合字の「こと」「こそ」「こゑ」

・「こそ」（冊子本より）



・「こゑ」（冊子本より）



（冊子本（上巻）翻刻）

太しよくはん 上

それわかてうと申は、あまつこや

ねのみこと、あまの岩戸をおしひ

らき、てる日のひかりもろとも、

春日の宮とあらはれて、国家を

まほりたまふなり。されはにや、かす

がをはるの日とかく事は、夏の日

はこくねつす。秋の日はみしかく、

冬の日はさむけし。春の日はのと

かにして、よくはんふつをしやう長す。

四きなことさらすくれ、めいしつなる

によりつゝ、はるの日とかきたてまつ

りてかすかと名つけ申なり。かのみや

のうち子は藤原うじにておはし

ます。ふちはらのその中に、たいしよ

くはんと申は、かまたちのしんの御事

なり。はしめはもんしやうせうにて

御座ありけるか、いるかのしんをたい

「」（題簽）

「」（一才）

らけ、たいしよくはんになされさせ
たまふ。そも此くはんと申は、上代に
ためしなし。さてまつ代にありか

「（二ウ）」

とき、めてたきくはんとなりけり。是
によつて此君をはふひとうとも
申。いつもかまをもちたまへは、かま
たりのしんとも

申なり。かすかの

みやにさんろう

ありてあまたの

くはんをたて

たまふ。

「（二オ）」

（第二図）春日神宮に参詣する大織冠

中にも、こうふくしのこんたうをさい
しよに御こんりうあるへしとて、しやう
ごん七ほうをちりはめ、しやこんたう
をたてさせたまふ。くわほうは天よ

「（三オ）」

「（二ウ）」

りあまくたり、くにのなひきしたかふ
事はふるあめのこくどをうるほふし、
た、草葉のかせになひくかとし。
君たちあまたおはします。ちやく女
はくわうみやうくわうくうと申奉て、
せうむ天わうのきさきにた、せ給。
と名つけて、三国一のひしんたり。
しかるに、かの姫きみのゆうにやさしき
御かたち、たとへをとるにためしなし。
かつらのまゆはあをふして、遠山に
にほふかすみにに、も、のこひある
まなさきは、せきやうのきりのまに、
ゆみはり月のいるふせい。ひすいの
かんさしはくろふしてなかければ、やな
きのいとをはる風のけつるふせい
にことならず。すかたは三十二さう、
なさけは天下にならひもなし。か、
るゆうなる御かたちの、いこくまで

「（三ウ）」

「（四オ）」

も聞へのありて、七みかとのそ^{御門}う
 わ^皇う、たいそ^太くはうていは、つたへきこ^開
 しめされて、み^見ぬこ^恋いにあくかれ、
 雲のう^上へもかきくもり、月のとも^友を^自
 のつから、ひかり^光をうしな^失いたまひけり。
 しん^臣かけいしやう、一^同とうにそうし
 申されけるやうは、きよ^玉くたいの
 御ふ^{風情}せい、よ^世のつねならすお^拜かみ申
 て候。なに^何をかつ^包ませ^給たまふへ
 き。おほ^思しめさるゝ事^召のさうは、ち^侍し
 んの中^臣へせんしあれと、そうし申^奏
 されたりければ、みか^{御門}とえいらんま
 し^取く^包て、あらはつかしやつ^包むに
 たへぬ花^堪のかの^香、もれても人のさと^悟
 りぬるか。いまはな^今にをかつ^包むへき。
 これより東^{とう}海^{かい}すせんり、日^日ほん^本ならの
 み^都やこにすむ、大^住しよくはん^織がを^弟と
 ひ^姫めを、かせ^風のたよりにき^便くからに、
 み^見ぬお^面もかけ^影のたち^立そ^添いて、わ^忘す

「(四ウ)」

「(五オ)」

れもやらていか^{如何}せん。しん^臣かけい^下せう^相
 う^承けたまはりて、これ^何はなにより
 もつてめてた^勅き御^立しよ^望うにて候物
 かな。ち^勅よくしを^立たて^輪り^言んけん^言に
 てむ^迎かいと^取らせ^給たまひ、ゑ^觀いらん^覽あれと
 の^僉せん^議きに^立て、う^連んか^賀と申^兵つ^兵わ^兵ものを、
 ち^勅よくし^立に^給た^給て^給させ^給たまふ。う^連んか^賀、
 す^既て^太に^宗たい^金そ^金う^札の^札き^給ん^給さ^給つ^給を^給給
 は^数り、す^奈せん^良万^都りの^着かい^織ろ^冠を^過す^日き、日
 本^奈なら^良のみ^都や^着こ^織につ^冠き、大^織し^冠よく^冠は
 ん^御のみ^許も^朝と^札にて、て^捧う^捧さ^捧つ^捧を^捧さ^捧く。
 大^織し^冠よく^冠はん^覽は^我御^我らん^王して、われ^王は
 これ^日、し^日ち^城い^小き^小と^国て^王せ^王う^王こ^王くの^王わ^王う
 の^臣しん^下か^左と^右して、い^嬪か^取にと^取して、い^異こ^国く
 の^王大^左わ^右う^取を^取さ^取う^取なく^取む^取こ^取にと^取へ^取き
 と、一^度ど^勅は^勅ち^勅よく^勅し^勅を^勅ち^勅たい^勅ある。ち^勅よ
 く^使した^立ち^立も^立と^立つて、此^旨む^旨ね^旨を^旨そ^旨う
 も^開ん^宗す。たい^太そ^宗う^宗いと^宗あ^宗こ^宗かれ、二^度ど
 の^勅ち^立よく^立し^給を^給た^給て^給させ^給たまふ。せ^聖う

「(五ウ)」

「(六オ)」

武皇帝召情
むくはうてい、聞しめし、なさは上
下によるへからす。せうこくのしんかの
子なりとも、そのはかりは

あるへからす。まるへん

てうをいたす

とて、かたしけ

なくも、くはうていの

みんはんを

なされければ、

(第二回 勅使を迎える太織冠)

勅使面目
ちよくしめんほくほとこして、いそぎ
たちもとつて、へんてうをさくくれ
は、たいそおほほきにゑいらんあり。
吉日えらひ、さうくむかひふねを
こされける。こんどのむかひのちよくし
には、たちはなのあつそんに、右たい
しんほうけんなり。そも、ほんてうと申

「(六ウ)

「(七オ)

は、小国なりとは申せとも、ち忍第
一の下になり。みれんのいてたちか
なふまし。けつかうあれとのせんし
にて、むねとのたいせん三百そう、き

さきの御ふねをはれうとうけき

しうと名つけて、しゆつたんをもつ

てかたとり、へにはあふむのかしら

をまなひ、ともにはくしやくのおを

たれたり。ふねのうち、にしきをし

き、ちんたんをましへ、くわうようらん

けいみかきたて、たまのはたは風に

なひき、こかねのかはらは日にひかり、

くせいのおねともいつつへし。はつ

ひてんくはん、たまを身をかさつたる

によくはん侍女、三百人すくつて、これ

はせんちうの御かいしやくのために

とて、かさりふねにそのせられたり

ける。しちいきよりも、もろこしまて、

すせん万りのかいしやうの御なく

「(七ウ)

「(八オ)

さみのそのために、をんかのまいある
 へしとて、ちこ百人すくつて、身を
 かさつてそのせられたり。すてに
 文月のすゑつかた、ともつなといて
 おしいたす。あまのかわせにあらねと
 も、つまこしふねのほをあけたり。か
 くてなみ風しつかにて、ふねはほん
 てうつのくにや、なんはのうらにつき
 しかは、ちよくしはならの京につく。た
 いしよくはんはうけとつて、ひとつは
 いこくの聞へといひ、又一つはほんてう
 のいくわうのためそとおほしめされ、
 さんかいのちんくはを山とつみ、五千人
 の上下を、そのとしの八月なかはより、
 あくるうつきはしめまで、もてなした
 まふ。たいしよくはん、くはほうのほと
 めてたさよ。うつきもやうくすへに
 なりゆきければ、吉日をえらひ、玉の
 御こしをたてまつり、なんはのうらへ

「(八ウ)

御いであり。それよりもれうとうけき
 しうにめされ、しゆんふうにほをあけ
 ければ、
 ふねはほとなく、
 たいたうのめいしう

「(九ウ)

「(九オ)

(第三回 難波を出港する紅白女たち)

いさく御むかひにまいらんとて、ひた
 りみきの大神、女くはんところ、百くは
 ん、けいせう、くはん人、しちやうに
 いたるまで、のこるところはなかりけり。

「(一〇ウ)
 「(一一オ)

のみな
 とにつかせ
 たまふ。たいりに
 聞しめされて、
 すはや、こく
 きやうけいよ
 「(一〇オ)

そもく大國のくにのかすを申に

一千四百四十國、こほりのかすを申に

九万八千よくん、てらのかすを申に一

まん二千六かじ、市のかすを申に

一まん二千八百、ちやうあんのいちと

申は、さいけのかすは百まんげん、人の

かすを申に、五十九おく十まん八千

人たついちなり。長あんしやうの

みなとより、たつみをさしてゆくみち、

三十五にふみわけり。おくなんたう

と申は、ひつしさるへゆくみち、五十

九にふみわけり。さいけいたうと申

は、にしをさして行みち、廿六にふみ

わけり。かうほくたうと申は、きたをさ

してゆくみち、すゑはたふたつ。と

うやうたうはふなちにて、すゑは日

本につけり。かゝるみちくよりも、

みつぎものをそなへ、きさきをおかみた

てまつる。あらありかたや、たゝめおかみ

「(一二オ)

申人たにも、ひんくをのかれ、たちま
ちにふつきの家となり、されは
にや、くわうていもれうかんにしたし
みなれちかつかせたまへは、しよひやう
をいやしたちまちに

やうしやうの
たいみにあへる

御もちのあひた

世すなほに

たみのかまと

ゆたかなり。

(第四図 太宗と紅白女)

かくてうちすきゆくほとに、きさきの
みやおほしめす。われはこれ、せうこ
くのものとありなから、大こくのきさき

「(一二ウ)

「(一二オ)

「(一二ウ)

にそなはりたる、そのこうめいを日高名ほんにのこしてこそ、とおほしめし、御思召ち父太た
いしよくはん、こうふくしのこんたう、おな同
しきしやかのれいさうを御積迦靈像こんりう
あるへきに、かの御堂たうのせにうに、
ふつくほうくをくつて、まつたいの
しるしともなさはや、とおほしめし召
そろへたまふたからには、まつくはけん原
けい、しゆびんせき。くはけんけいと
申打は、うちならしての其後に、こゑ声さら
になりやます。と、めんとおもふとき
には、九てうのけさをおほふ也。しゆ酒
ひんせきはすゝり。かのすゝりのとく
ゆうは、水なくしてすみをすつて、心
のまゝにつかふなり。ほん本のほけ法華
きやうを、たら多羅葉ようにて、あなんそん阿難尊
しやのあそはしたるしちしやう。る七
り瓶の水かめ、しやくせん赤梅たんのけいた器
い、へ映るりの花たて、せん瓶たんけ脇う

「(二四才)

「(二四ウ)

息尼く、にくたん陀しゆ樹のしゆす数珠一れん、く
わうこのとらのかは、こん金しきのし獅子
のかは、くわ火鼠そのかは三まい、かゝるた宝
からのそのなかに、しやくせんたんの赤梅
みそきにて、五すんのしやく釈迦をつくり
たて、にく肉しきの御舍利し身を御身しん
につくりこめなから、はう八すん寸のすい水
しやう品のたう塔のうちにおさめて、む無
けはう画し宝し珠となつて、これを一別の
てう重はう宝にし、をくりふみ文をへつし紙に
かき、いし石のはこにおさめてをくら給せた
まひけるとかや。此玉即はすなはち興こう
ふくじ福のほん本そん尊しやく釈迦かほ仏とけ眉のみ
けん問にゑ影り嵌はめたまふ給へきなりと、
かき書こそおくりた送まひけれ。さてし守
もかゝるてう重はう宝を、たれか誰はし律こ
してをくる送へき。きりやう器の人をえ遣
らめとて、つ兵はものともをめ召さるゝ
に、大國習のならひにて、百人か大しやう特

「(二五才)

「(二五ウ)

を百戸こと名付つけ、千人か大しやうを千
 子戸といひ、万人か大しやうをまん戸こと
 名付つけ、かうほくたうのすゑ、うんし
 うといふくに、まん戸こしやうくんうん
 宗大そうとて、たいかう剛一のつわものあり。
 をとらぬほと劣のつわものを三百人あ
 そへ、みやこをたつて大たうの明州めいし
 のみなどより、一よう業のふねにさほを
 さし、おいての風乳にほをあけて、
 数千せんまんりををくりけり。かいてい
 にすみ給ふ八大りうわうのさう王、
 玉本の日ほんにわたる事諸をしんつうに
 てしらしめし、もろく電のりうわうた
 ちをあつめ、おほせられけるは、われら
 はすてにかいていのりうわうたりと
 いへと、五すい衰三ねつひまもなく、を
 つこうにもあい劫かたき、しやくせんたんの
 のみそぎにて、五すん寸のしやか赤のれ
 いふつ私の、此なみ波のう上へに御さあるを

「（一六才）」

「（一六ウ）」

いさく奪むは我い取て、われらしやう正か
 くなるへし。もつ尤ともしかるへし、とて八
 大りうわう電のなみ風波あらくた立ちた
 まへは、ふね船ひようたうし、ちさんし運、なみ
 ちしつか路ならさりき。されとも、きとく奇ふ
 し思きのほとけ私のめしたる御ふねなれ
 は、しやうかい上の天人はくもをし波のき、
 ふつ仏ほう法しゆ守このやしや、らせつ利は、な
 みかせ風をしつめさせたまへは、ふね船にし
 さい細はなくして、みつ三は羽のそや征を矢いること射（一七才）
 く、ことさら殊おいて更となり追にけり。りう電
 わう王いと怒かり手をなし、なみ風波にてと
 とめすは、おさ押へてむ奪はいと取るへし。さ
 あらん時ときに、い異こく国のもの者、さためて
 つよく強ふせくへし。りうわう電のけん眷
 そくに属、しかる然へき者ものはなし。しゆ修らは
 たけき猛ものなれは、た頼のふてみんと
 のたまひて、あし阿しゆ修ら羅たちを頼そた摩のま
 れける。か修のしゆ羅ら摩の大しやう摩、まけい摩

首羅、もろくのけんそくをひきく
してこそいてられけれ。もとよりの
むとうじやうなれは、百千にやつかん
のけんそくともを、いきやういるいに
いてたゝせ、ほこ、たうちやうをとり
もたせ、かたきはすまんき候とも、いく
さは家のものなれは、玉にをいて
はむはいとりてまいらせんと申
て、日ほんとなうとのしほさかいの
ちくらかおきにちんをとり、まんこかふね
をまちぬたり。これをはしらて、まんこ、
しゆんふうにほをあけ、心にまかせ
てふかせゆくに、日比ありともおほえ
ぬところ、しまひとつうかへり。みれば
はたあしひるかへし、くろかねのたての
あいよりも、つるきやほこのいなひかり、
たうちやうのかけともか、うんかのこと
くみえければ、あれはなにといへる
しさいそや。いかなる事のあるへきそと、

「(二七ウ)

こゝろもとなくおもはれけれとも、
さあらぬていにてふかせゆくに、
かのしゆらの大しやう、まけいしゆら
一ちんにすゝみいて、天をひゝかす大
をんにて、たゝいま此おきにせきを
すへたるつわものを、いかなるものと
おもふらん。しゆらといへるものなり。かい
ていのりうわうたちをみつかんため、
しいしゆをいかにとおほすらん。御ふねに
ましますしやくせんたんのみそき
にて、五すんのしやかのれいふつ、よ
のたからはほしからず。そのすいしやう
のたま、すみやかにわたされ候へ。さら
すは、一人もとをすまい、と申。まん
こ、此よしきくよりも、あらことくし
のいきをいさうや。さてはをとにうけ
たまはる、この阿しゆらたちにてまし
ますよな。

「(二八ウ)

わか大国のならいにて、百人か

大しやうを百戸ことな名付つけ、くは官

んにんといふ、千人かた大い

しやうをせん千戸ことな名

つけて、しゆりやうと首顔

いひ、万人か大将を

まん万戸ことな名付つけ、

しやうくん将軍と

これを

いふ也。

「(一九ウ)

「(二〇オ)

(第五回 修羅との合戦)

「(二〇ウ)

「(二一オ)

かいくしくはなけれど、一まん万人

か大しやうなれば、まん万戸こしやうくん将軍う

ん宗そうとは、それかし某か事にて候。も尤

つとも、りうく竜宮うよりの御しよ所も置うに

したかいて、すいし水やう晶のたま玉ま参いらせ

たくは候へとも、七みか御門とのな中か参よりも、

きりやう器量の人とゑ選らまれ、日ほ本んの

ちよくし勅使をたまはるときの日より

もして、いのち命をはわか君のおん思の

ためにたてまつる。されは、めい命いの命かる輕き「(二二ウ)

事は、此き義による事なれば、いのち命

のあらんかきり眼は、たま玉においてはとら取

るまし欲いそ。けにとたま玉かほ欲しくは、

まん万戸子をうつてとれやとて、からく由聞

とそわらいける。しゆら修羅とも、此よし見きく

よりも、さらは手並なみ見をみせんとて、て鉄

つちやう杖、らん乱は刃のつる剣きをひ引つさ提け、

うん雲か霞のことく攻せめか攻ゝる。

「(二二オ)

〔注〕

(一オ) あまつこやねのみこと…天照大御神が天の岩

屋に隠れた際、祝詞を奏した神。中臣氏（藤原氏）

の祖神。

(三ウ) しやこんたう…不明。

(四ウ) 七みかとのそうわう…不明。七つの国の総主

の意か。

(六ウ) まるへんてうをいたす：「まる」は男性の一人称「まろ(麻呂)」の転。「私が返牒を致す」の意。

(八才) ちんたん：沈香と白檀。

(八才) くせいのおね：衆生を極楽浄土へ渡す船。

(二四ウ) ほん本のほげきやう：天竺渡来の梵語で書かれた法華經。

(二四ウ) たらよう：多羅樹の葉。天竺では経文を写すのに用いた。

(二四ウ) あなんそんしや：釈迦の従弟で十大弟子の一人、阿難陀。經典の基になった釈迦の経説をよく記憶していたとされる。

(二五才) みそき：神仏の像を造るのに用いる木材。

(二五才) しやり：釈迦の遺骨、仏舍利。

(二五ウ) むけはうしゆ：無価とは値段が付けられないほど高価なこと。『法華經』「五百弟子授記品」に説く「衣裏の宝珠の喩え」(仏に結縁する仏種を懐きながらそれに気付かない愚かさの喩え)の無価宝珠に由来する名称。

(二六ウ) 八大りうわう：法華經説法の座に列したという八種の龍王。難陀跋難陀娑伽羅和修吉徳叉迦阿那婆達多摩那斯優鉢羅。

(二六ウ) 五すい三ねつ：五衰は、天人が死ぬ前に現われるという五種の衰相。三熱は畜生道で龍・蛇などが受けるとされる三つの苦しみ。

(二六ウ) をつこう：非常に長い時間。永遠。

(二七才) しやうかく：仏の悟り。

(二七才) やしやらせつ：夜叉も羅刹も元々はインドの悪鬼だったが、仏教に帰依して守護神となった。

(二七ウ) しゆら：阿修羅の略。常に帝釈天と戦っている悪神。

(二八才) ちくらかおき：具体的にどのあたりかは不明。

(二九才) みつかんため：「支援するため」の意。

(二一ウ) かいくしくはなれとも：「しっかりと頼みにできるようなさまではないけれども」の意。

〈校異〉

- (一才) あまつこやねのみこと―あまつこやねのみこと
との（卷子本）・天津こやねのみことの（寛永版）
- (二才) たて―たてさせ（卷子本）（寛永版）
- (四ウ) 三十二さう―三十二さうにし（卷子本）（寛永版）
- (五才) さとりぬるか―さとりけるか（卷子本）（寛永版）
- (六才) しんかとして―しんかとし（寛永版）
- (六才) いかにとしていこくの―いかに大國の（卷子本）・いかにとして異國の（寛永版）
- (七ウ) ゑいらんあり―えいりよあり（卷子本）（寛永版）
- (七ウ) むかひふねを―むかひふねをそ（卷子本）（寛永版）
- (七ウ) せんしにて―せむきにて（卷子本）・せんきにて（寛永版）
- (八ウ) てんくはんたまを―てんくわんたまをたれ（卷子本）（寛永版）
- (九ウ) たいしよくはん―たいしよくわんの（卷子本）
たいしよくわん（寛永版）
- (二二才) 長あんしやうのみなとよりたつみを―長安
城のみなとより十のみちわかてりけんろけんなむ
たうとはたつみを（卷子本）（寛永版）
- (一五才) しやくせんたんのけいたいへいるりの花た
てせんたんけうそく―しやくせんたんのけうそく
（卷子本）・しやくせんたんのけいたいへいるりの
花たてせんたんのけうそく（寛永版）
- (二六ウ) 日ほんに―日本へ（卷子本）（寛永版）
- (二八才) しほさかいの―しほさかひ（卷子本）（寛永版）

【編著者略歴】

伊藤 善隆（いとう よしたか）

昭和44年（1969）東京都生まれ。

早稲田大学大学院文学研究科日本文学専攻博士課程退学。
早稲田大学文学部助手、湘北短期大学教授等を経て、現在、
立正大学文学部文学科日本語日本文学専攻コース准教授、
博士（文学）。

著書：『コレクション日本歌人選34 芭蕉』（笠間書院、2011）
など。

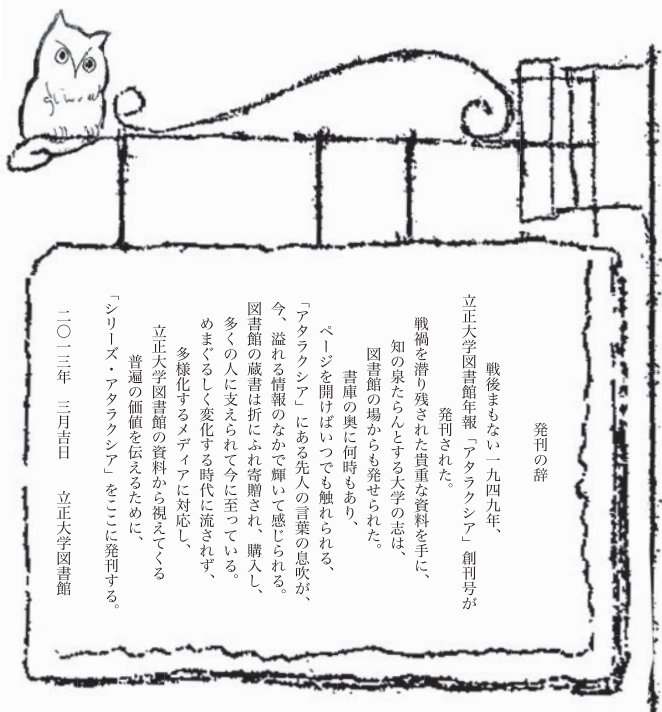
シリーズ・アタラクシア vol.4

立正大学古書資料館蔵 奈良絵本『大織冠』上巻
—影印と翻刻—

令和元年12月25日初版発行

編著者 伊藤 善隆
編集 立正大学品川図書館
発行 立正大学図書館
〒141-8602 東京都品川区大崎 4-2-16
電話 03-3492-6615
<http://www.ris.ac.jp/library/>

印刷・製本 株式会社イーフォー
〒141-0031 東京都品川区西五反田 8-7-11
電話 03-3779-1140



発刊の辞

戦後まもない一九四九年、
立正大学図書館年報「アタラクシア」創刊号が
発刊された。

戦禍を潜り残された貴重な資料を手に、
知の泉たらんとする大学の志は、
図書館の場からも発せられた。

書庫の奥に何時もあり、
ページを開けばいつでも触れられる、

「アタラクシア」にある先人の言葉の息吹が、
今、溢れる情報のなかで輝いて感じられる。
図書館の蔵書は折にふれ寄贈され、購入し、
多くの人に支えられて今に至っている。
めまぐるしく変化する時代に流されず、
多様化するメディアに対応し、

立正大学図書館の資料から掘えてくる
普遍の価値を伝えるために、

「シリーズ・アタラクシア」をここに発刊する。

二〇一三年 三月吉日 立正大学図書館

立正大學圖書館

